96
46

96-960

明治
43. 5. 14
内交

序

西洋諸國には猫を飼養することが大に流行すると共に之に關する著書も隨分澤山あり、又其飼養に就ても學問を應用するので、種類の如きも良いのがある、飜つて我國を見るに、猫は古代より飼養され恰かも家族の一員とせられ居るにも拘はらず、猫に關する著述もなく、例令澤山あつたにしても悉く戯作隨筆の類のみて、猫の飼養に就て益するものが無いのである、近年ペスト病の流行に連れて、猫をして平生鼠を捕らしめ置くの利益を認め、政府でも猫の飼養を奬勵することになつたが、猫に關する智識の缺乏と且猫に對する一種の感情とは、相待つて政府奬勵の趣旨を全ふするには程遠い樣である、著者は元も今も實業社會のものであるが、數年來猫を飼養して、種々なることを觀察して色々と發表しつゝありしが、今回一方に猫の飼養のことを述ぶると共に、其性質を

明かにする爲に、美談を擧げ傳說を說きたるものを著作し、之を公にするとて序文を求めて來た、今之を見るに著者が自白する如くに、科學的研究を主としたものではないけれども、之によりて猫の事が一般に知れ渡るに至ることを、疑はない、余は猫の著述が未だ我國に見當たらない、此時に、著者が自ら隗となりしを喜び、之を江湖に紹介するものである、政府の奬勵に直接關係を有する町村吏員や、又猫の飼養に大關係ある婦人達は此書によりて得る處は尠なくないであらう余は改めて著者には一層の研究を深ふせんことを望み、併せて江湖の諸氏には一讀せられんことを請ふ茲に數言を綴りて序文となすこと爾り

明治四十三年三月

理學博士　佐々木忠次郎誌

序

小生は夙から猫に就てのオーソリティであると密かに自惚れて居た、何時かこれを文學的方面に活用したいとも思ひ、またその秩序的研究もして見たいとも思つても居た、然るに前者は夏目漱石氏の專賣になつて仕まい、後者に就ては現著者石田君が顯はれて頗る精密な研究と觀察とを遂げられた、それで小生の望は人に奪はれて仕まつたのである、がもと〳〵小生の趣味若くは觀察は頗る狹少て且つ不完全極まるのてあるから夏目氏や現著者のやうな人が出て斯樣な方面を開拓された事は小生の頗る愉快とする處て小生は決して自分の希望を奪はれたやうな心持は仕ないのてある。

世間には猫の好きな人も少くはないが、大體から言へば猫はむしろ好かれて居ない方てある、殊に犬と比べてその優劣を言ふ時は必ら

ず猫を悪く言ふのが常てある、近頃コッホ氏が來られて猫の相場が酷く上つたが、これは單に實用といふ點から見た事て、猫の面白味に至つてはまた一向に世に知られて居ないと言つて差支ない。全體猫の趣味はその可笑味にあるのだが、可笑味を解しない日本の社會にそれが喜ばれないのは無理もない。只所謂可笑味に注意した俳諧にはこれがその主要な題目になつて居る、それから夏目氏の猫も深い意味に於てのお可笑味の文學てある、お可笑味の解らぬものに猫の解りやう等がない。

猫は無作法てある傍若無人てある、失禮千萬てある、冷かてある、不關焉てある、それて居て家庭に缺くべからざるものてある、これが猫の面白い處てある、俳味てある、小生は猫に關する書物の中に、耶蘇降誕の席に猫を書いた書家の洞察力と想像力との非凡な事の書いてあるのを見て感服した。人文を左右し天下を聳動すべき耶蘇降誕の大事實の前に聖賢も頭を垂れてこれに拜待して居るに、猫の先生棚に上つて香箱をつくり不關焉としてその光景を冷視して居るといふのがその畵の主眼てあるさうだ、猫の面白味はさういふ處にある。然るに儒教一方て育てられた吾が社會にはそんな趣は了解されない、從つて猫に就ての智識も從來全く缺乏して居た。

然るに今石田君がその趣味を解されその研究を公にせられたといふのは實に小生の愉快に感ずる處て同時に世間の爲めに喜ぶべき事てある。實に破天荒の事といふべきてある、小生は吾があらゆる家庭が三毛なり斑なりの生きた猫と共に是非この書をその書齋に若くは爐邊に備へられん事を希望するものてある。

戸川秋骨誌

自序

我國に於て愛憎交々至る動物が二種類ある、一は狐であつて一は猫であることは、何人も知る處であらう、而して此狐に就ては隨分佳話もあるけれども、猫に至ては悉く嘲罵憎惡で美談は實に少ないのである、野棲動物たる狐は兎に角として、家畜として愛養さるゝ動物の中に猫程殘酷なる批評を受て居るものはないと思ふ、我輩猫黨の一人として之を默する能はず、彼が爲に冤を雪いてやらうと心掛けたが、確たる證據の上に立論しなければ徒勞に終ることを信じ、先づ自ら實驗するに加くはなしと、即ち今より六年前四頭の猫兒を貰ふて來て、之を愛育し、日常生活乃至精神上の觀察を試みつゝ今日に至つたのであるが、其間自分の不注意から猫を殺したこともあり、又盜まれたこともあつたので、親子親族關係に就て調査する能はざりしことも多く、又我輩の淺學よりして解決せざるものも尠なくない、否嚴密に言へば我輩は猫に關して何物も知らぬと云ふて差支はない位である、從つて未だ猫の爲に其冤を雪ぐことは出來ないのみならず、或は却て累を及ぼすかも知ぬのであるが、一昨年コッホ博士が來てから政府でも猫の飼養を奬勵することになつたから、多少でも猫のことを書いたならば政府奬勵の主意にも添ふかと思ひ、時事新報を藉りて記述を試みたが、彼の記事は我輩が話して家人に書かせたので、多少の誤謬もあり、又書き足らぬことも各節に亘りて在つたことを認めた、然るに諸方の愛讀者より或は誤謬を正され、或は淺薄なりと罵られ、又或は過大なる褒辭を受けて冷汗を流したこともあるけれども、要するに誤謬淺薄の誹りは眞實なる忠告で、此忠告は啻に我輩一個人のみならず猫の爲にも大なる利益を與へたことゝ信ずる、爰後訂正雪冤の爲に一書を公にしやう

と心得、即ち本書の著述に着つたが知らぬことは案外に多くして知つて居ることとは實に少ないので、纔めては見たものゝ所謂聖の上塗りをするやうな評であること、を悟つた、併し知らぬことは知らぬとして後日の研究に譲り、更に角自ら陋たるの覺悟を以て二三外國の著述を參考し我輩の所見を述べて、之を世上に公にすることにしたのである、前陳の如き次第であるから本書には、組織上に於ける猫の眼のことや、又一腹より色々な毛色の猫の生ずることや、其他重要な點に就ては全く省いて記し無いこともあるのみならず、猫の日常生活や感情に關するものも主として我輩の猫によつたのであるから、本書は極めて狹き範圍に於て觀察したものと言はざるを得ない、且又其研究も甚だ行届いて居ないのであるが、併し本書は敢て猫の科學的研究を公にするものではなく、全く猫が憎悪と嘲罵とを受て居るのに同情し、彼が爲に其冤

を雪ぐを以て主眼としたのであつて、一言にして盡せば猫が極めて愛らしき家畜なることを明かにし、政府の慫慂に一助を與へんとするに外ならぬ、淺薄の誹りは再び受けるであらう、誤謬の訂正は之を竢つふを竢つ、唯本書幸ひに少しにても猫のことを理解せしむるに足るならば本懐の至りである、一言を叙して本書の性質を明かにする次第である。

尚終りに臨むて過褒を受けたる佐々木理學博士と戸川秋骨君に感謝すると同時に、本書編述の爲に勞を惜まざりし友人上田仁左衛門君に謝意を表す。

明治四十三年三月上院

臨染河畔の茅舍に於て　**著者誌**

目次

第一章　猫……一
第一節　猫の種類……一
第二節　猫の態勢美に就て……二六
第三節　猫の性質と壽命……三一
第四節　猫の毛色と雌雄……三九
第五節　猫の雌雄及び毛色と捕鼠……四二
第六節　猫の捕鼠性減滅及び増進……四七
第二章　猫の日常生活……五六
第一節　猫と家……五六
第二節　猫と食物……六二
第三節　猫の餌食法……六八

第四節　猫の睡眠と小供……七二
第五節　猫の衛生……七七
第六節　猫の疾病と治療法……八二
第七節　猫の姙娠と小猫……九二
第三章　猫の智情意……一〇〇
第一節　猫と色の嗜好……一〇〇
第二節　猫の表情……一〇五
第三節　猫の智慧と理性……一一〇
第四節　猫の友義……一一五
第五節　猫の夫婦と親子……一二一
第六節　猫と他動物との親和……一三〇
第四章　猫の實用……一三七

第一節　猫とペスト病……一三七
第二節　猫と天氣豫報……一五二
第三節　猫の毛と皮……一五九
第四節　猫と社會經濟……一六三
第五章　猫の美談……一七〇
第一節　猫に美談少なき理由……一七〇
第二節　一巖寺の白猫……一七三
第三節　西林院の猫……一七九
第四節　墓地を弔ひし猫……一八三
第五節　主人の貧乏を救ひし猫……一八五
第六節　命を捨てゝも令嬢を守りし猫……一九一
第六章　猫に關する重大なる傳說……一九五

第一節　釋迦の涅槃像に猫の居らぬことに就て……一九五
第二節　死人ありたる時に猫を連れ去り且つ其棺の上に刀を置くことに就て……二〇〇
第七章　猫辭典……二〇八
第八章　猫の歸らぬ時の心得……二二九
第一節　猫の歸らぬ時の禁厭……二二九
第二節　猫を家に落つかす法……二三〇
第九章　猫と俳句の宗匠……二三一
第一節　俳句の宗匠と猫……二三一
第二節　古麻戀句合……二三七
第三節　一茶と猫……二五三
第四節　女流の俳句と猫……二五六

目次終り

第五節　諸名家の俳句と猫……二五七
第拾章　猫（大英百科全書所載）……二六二

第一章 猫

第一節 猫の種類

石田孫太郎著

史家の傳ふる處によれば猫は既に四千年の昔埃及國にて家畜として飼養されたと云ひ、印度に於ても亦三千年の昔飼はれて居たと云ふことである、我日本に於ては猫は佛敎と共に其山の如き經卷や又は佛像

等を保護する爲めに輸入されたものと唱へられて居る、而して現今に在りては猫の分布は極めて廣くして到る處猫を見ずと云ふことなしてある。

猫はフエリス、ドメスチック即ち家猫科に屬する動物であるが、其分布の大なると共に其種類も實に多いので、之を立派に區別することは決して容易ではない、無論之に就ては學問經驗兩つながら備へて居る人でも尙大なる困難を感ずるのである、人によりては歐羅巴種と亞細亞種の二種に分ち、又東洋原産長毛屬と歐洲産短毛屬とに區別する人もある、併しながら之等は何れも正確のものではない、我輩を以てすれば斯の如き種類の區別法は、前者は餘りに漠然として捉へ難く、後者は甚だしく複雜と誤謬とを混じて居ると思ふ、學問上の區別の事は暫く專門學者に待つとして、玆に極めて通俗的なる區別法を以てすれば、一は毛の長短によるもので、二は尾の有無によるものである、即ち前者によれば毛の長いのを長毛族とし毛の短いものを短毛族とする、後者によれば尾の長短を問はないで、凡て尾のあるものを有尾族とし、尾の無きものを無尾族とする、併しながら此尾の有無を以て種類の區別とする時は、聊か穩當を缺くの恐れが無いとも言へぬからして、寧ろ種類の區別は毛の長短によりて行ひ、東洋産も歐洲産も無尾の猫も有尾の猫も、皆長毛又は短毛猫の一種類中に、編入するのが適當なりと信ずる、即ち本邦産の猫は純白色も虎猫も斑猫も、又尾の長いのも短いのも凡て短毛族となし、波斯種若くはアンゴラスと稱する猫は、凡て長毛族に編入するのである。

長毛族の猫にはアンゴラス種、佛蘭西長毛種、ペルシヤ種、露西亞長毛種の四種族あると云ふことであるが、西洋に於ける猫通の著述によれば

●●●●●アンゴラスは特別なる一種類を爲すものでなく、波斯種中の一特質より養成したるもので、畢竟波斯族に編入すべきものなりと云ひ、露西亞長毛族も亦波斯種に外ならぬので、今日多少の差異を有するのは全く氣候の影響を受けて應化變生したるものと稱し、佛蘭西長毛族も波斯種たる範圍を出づることが出來ぬので、唯此國に於て非常に猫が善良になつて居るのは、僧侶が内職に猫飼養を營みし結果に外ならぬと記してある、要するに歐米に於て貴重せらるゝ長毛の猫は波斯種に非ざれば波斯種より出でたるもので、即ち前記の四種中の一であるが而も此四種を判然區別することは非常に困難なので、英國猫展覽會に於ても其審査官は凡て長毛族をば彼斯族としたそうてある、左れば前記のアンゴラス、魯西亞種、佛蘭西種と云ひ、又土耳其埃太利米國等に居る處の長毛種と云ひ、又近く日本に來て居る長毛種と云ひ、何れも其原祖は

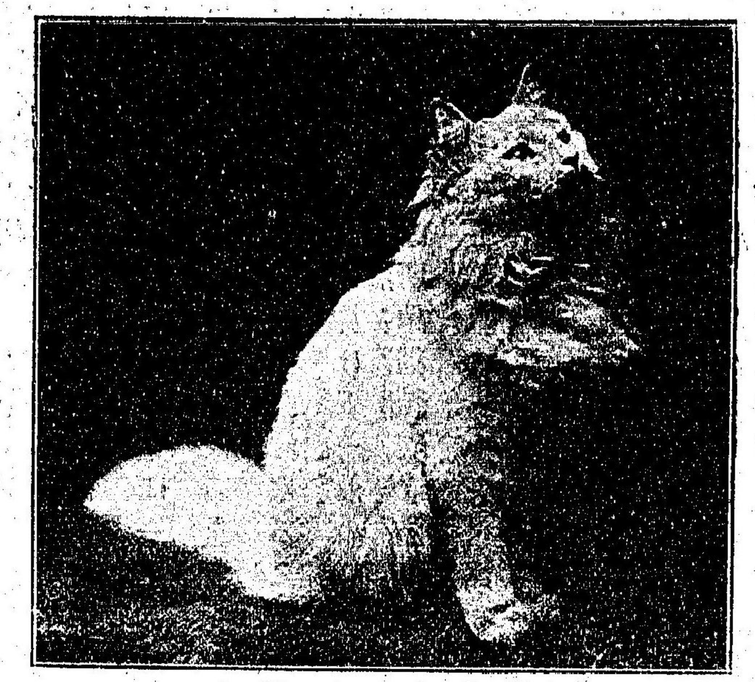
波斯種なれど、飼育者の行ひたる交雜又は氣候の影響により多少の變化を爲したるものに、特別なる種名を附して居るものと言ふて良からう、併しながら假令小特長でもあるとすれば之に就て記述せねばならぬとして、茲に●●●●●アンゴラス、魯西亞種、佛蘭西種等に關する小記事を作り、進むで長毛族の代表猫たる波斯種に就て種々なる記述を爲し以て長毛族に於ける品種を明かにするであらう。

●●●●●アンゴラス種に屬する猫は、波斯種の如くに頭は圓からずと雖も、耳には其内部に至る迄柔軟なる毛が生へて居つて、尾は地に垂るゝ迄に長い其毛は内外の二重になつて居り、外部は非常に美はしく且つ滑かで内部には粗毛が生へて居る、魯西亞種に屬ずる猫は、耳が大きく、四肢が短かく、尾は箒草木の如く、毛皮は粗雜強硬其彩色は不規則て暗灰色を帶びて居るものが多い、佛蘭西は前にも言ひし如くに猫飼養の最も發

達したる國であるが、之はカアーサシアンに屬する僧侶が內職の爲に猫を飼育し、之を市場に賣出したから來たので、アンゴラスと純粹波斯種との交雜により拵へたものと信ぜられて居る、佛蘭西種の特長としては、毛が特に長くして滑かで、靑色のもの最も貴重せられて居るのである。

波斯種猫は顏は廣くして圓く、耳は小さくして內部に叢脈を有し、體軀は比較的に長くして、尾は房々とし先端に近づくに從つて益々房々して居る、毛は身體の各部に亘りて一樣に長く、且つ甚だ美事である、而して其毛色は白きあり黑きあり赤きあり鼠色あり銀色あり龜甲形あり鳶色あり波紋狀を呈せるあり煙灰色あり靑色あり橙黃色あり其他實に多種多樣であるが其重なるものに就ては各個の特色を次に述ぶるとして、此種の猫に於ける一般賞翫上の優劣を擧ぐれば、顏は成るべく短かく且つ廣いのを貴び、耳は小にして毛に掩はるゝ計りなるを可とし、目も亦大きくして圓きを上とす、前脚は眞直にして太く、尾は飽迄も房狀を爲すを擇ぶべく、毛は一樣に長くして顏を掩ふ位なるを首とするのである、背中のふつくりとして居ることや、體格の强健なること抔は、茲に事々敷言ふの價値はない、之れ凡ての猫に於ける一般の條件であるからである、又細長い顏や楔形の顏などは所謂猫顏でないみならず、凡ての猫の劣點と言ふべきである。

一、白色波斯種　此種の猫は一般波斯種に共通せる處の大なる頭と小さき耳とを有して居つて、眼球は寶玉も及ばじと思ひ能ふ程に綺麗な靑色を呈して居る、而して其目によりて表現さるゝ處の愛嬌は餘人之を想像する能はざる迄に發達して居る、併しながら此種の猫にも往々



白色の波斯種猫

にして一眼は青で一眼は綠色を帶び又は兩眼とも黃色を呈するが如きこともあるさうだが斯の如きは白色波斯種として價値が少ない、毛色は無論純白なのであるが此猫から時として黑色又は灰色の斑點あるものを出すと云ふことである。

二、黑色波斯種　此種の猫は唯其色が純粹に黑ければ良いので少しても白色又は其他の色の毛があつてはならぬ、眼は深き橙色又は帶銅色のもの最も愛嬌を呈し、青色や綠色のものは毛色との配合上吾人の愛着を引くことの少ないものである、而して此黑色猫は白色猫と共に新しき品種を作るに必要な猫で、賞翫上の價値の有無に係らず、甚だ貴重なものである。

三、金色波斯種　此色の猫は波斯種の猫中に於て最も美麗なもので毛の隱れたる部分は白く其末端は灰色を帶びて居るものであるが、併し其光澤は古代の黃金色なので、又其古代の黃金色を帶びて居るのが最も美麗である、眼は愛らしき綠色の玉の如く、尤も中には橙色の眼を有して居るのもある、體格は他の猫より小さく、顏も亦稍狹いものである、此猫の小さい時には往々暗鼠色（

が女猫は殊に其傾きがあるのである）を呈するものであるけれども之を以て黃金色とはならぬものと速斷

せぬが良い。

青色斯波種

四、青色波斯種　此種の猫は波斯長毛種と他の帶青色の猫との交雜によりて出來たものらしい、其毛は波斯長毛種の如く長からず、と云ふて短毛族の猫程に短かくない、此猫の毛は名稱の現はして居る如くに全身少しの差毛なく全く青色を帶びて而も其毛に光澤を有するもの程貴ばるゝのである、此猫の目は頗る大きく其色は深き橙色又は輝ける琥珀色を呈して居るのを第一とする、中には綠

色の目を有して居るのもあるさうであるが、斯の如きは餘り愛されて居ない、耳は小さくして總毛を以て掩はれ、如何にも愛苦るしい顏形を以て居るのを普通とすれども、中には耳の大きいのも出れば、又頤の下等に白き毛を生ずることあり、又其他の色も出ることもあるから、此青色猫を有し又は求めんとする者は之等の點に留意するが良い。

五、斑の波斯種　此種の猫は種々なる猫の交雜によりて出來るもので、青にせよ、黑にせよ、又白にせよ一色なるを崇とする波斯猫の仲間に於ては、此斑猫は純粹なる波斯猫としての尊敬を受けぬのである、併しながら如何なる色の配合により出來たる斑猫にせよ、綺麗なるは無論のことて、之には三色の斑猫たると二色の斑猫たるとを問はない、然れども此斑猫の綺麗なと綺麗ならざるとは斑と爲るべき毛色の配合によるので、亂雜な毛の生へ方では却て醜を增すことは、獨り波斯猫に於

てのみ然りてはない、而して此斑猫には、斑點によるものと斑理によるものとの二種類ある、斑點は白色と黒色との二色又金色と白色との二色或は白色と黒色と金色との三色たると、又他の色たるとを問はず、凡て正則に出て居るのが好く、斑理も亦或る臺色の上に美はしく出來て居て栽然たる縞のやうになつて居るのを良しとする、目の色も色々であるが、金色の斑猫の如きは綠色の目を持つを普通とすれども、又外の目色を呈するものもある、尙之等の斑猫が如何にして出來るかを述べたいが、之に就ては深く研究するの必要があるから後日を期するであらう。

六、煙色波斯種　此種の猫には青煙色のものと暗煙色のものと又煙黑色のものとある毛の組成は煙黑色のものにありては根元は白くして其尖端は煙の色を帶びて尙其上に暗灰色を加へて居る、一寸之を見ると躰の毛は蒼白く見え、又耳の總も其色に見えるのである、青煙色の猫

も亦毛の根元は白く、其尖端は暗色を帶びて居る、首の廻りには白色の長毛叢生し、耳には矢張總を有つて居る、而して此種の猫は顏は濃き暗黑色を呈して居つて、眼は一般に橙色を帶びて而も大きいのであるから、隨分愛らしい猫であるけれども、何故か西洋に於ては深き寵愛を受けて居ない、併し何れかと言へば煙黑色の猫は青煙色や暗煙色のものよりも愛を引いて居るのである。

煙色波斯種

以上述べたる處の六種の波斯種は極めて著明なもので、尚仔細に其毛色を別つて說明したならば、それのみにても大層な業である、然れども約して來れば何れも波斯長毛族に歸するのであるから、前述せし處にて、波斯族の猫とは如何なるものなるかを知るには、先づ事足と思ふのである。

次は短毛屬の猫であるが、歐洲にては長毛屬の猫を呼ぶに凡て波斯種を以てするが如くに短毛屬の猫をば悉く英國種と稱して居る、然れども之は歐洲に於て歐洲人が斯く言ふて居るので、斯の如き稱呼の無意義なるは長毛族の猫を波斯種と呼ふが如きものではない、見よ短毛族の猫の分布は實に廣いので、全世界到る處に之を見ずと云ふことはないのである、我日本に於けるものも所謂短毛族の猫で、毛色を以て品種を區別したならば隨分澤山なことになる、朝鮮には朝鮮種あり、支那には支那種あり、暹羅には暹羅種あり、印度には印度種あると云ふ風に、何れの地にも此短毛族の猫は居るのである、左れば之を以て直に英國種と云ふのは大なる誤謬と云はねばならぬ、併しながら此短毛族の猫を英國種と呼ぶの可否に拘はらず、矢張此種の猫に於ても歐洲にては著しく發達して居ることは否定すべからざることで、此點に就ては我輩遺憾ながらも彼を崇となしければならぬのである。

短毛族の猫の分布は前述の如くに廣いのであるから其種類も澤山て、又其毛色や體格の如きも多種多樣である、而して此種の猫は一般に長毛族の猫よりも強健であるが、又其毛の關係よりして飼養は容易である、現に我國の如きは飼養すると云ふよりも放置すると云ふ方が當り居る位なものであるから、直に其飼養の容易なことが判るであらう、且夫此短毛族の猫には種類の多きに從つて善良なるものが澤山あり、飼

養も甚だ容易であるに拘はらず、長毛猫の如くに寵愛を受けず從つて其値段の如きも廉價である、併しながら愛翫用と捕鼠用とを兼ぬるのは此短毛族に限るので、猫としては寧ろ短毛族の方が貴い樣に思はれるけれども歐洲の如き猫を飼ふのに金絲雀でも飼ふ積りでやる處では、短毛族よりも長毛族の方が貴まれて居るのも無理のないことである。

短毛族の猫の毛に於て優越なる點は、最も良く斑猫に於て現はれる、長毛族の猫にありては美麗なる龜甲の如きも、極度の美を爲す能はず寧ろ却て醜くくなる爲めに、彼等は凡て一色の猫を貴ぶのであるが、短毛族に於ては龜甲も其他の斑點斑理も極めて明瞭に出づるものである から、斑猫となれば其美はしきこと到底長毛族の猫の及ぶ所ではない、以上短毛猫に就て其大體を述たから、之より種々なる猫の特長や性質等を述ぶるであらう。

シヤム種

●一、シヤム種　短毛族の猫の中にて最も高價を占めて居るのは此●●シヤム種であるとのことである が、此猫は體の毛は、暗褐色で顏面と目の周りに黑色の斑點を有し、耳や鼻先は眞黑であるから、一寸見ても一種の愛嬌がある、尾は短かくして太い方で、目は青色を帶びて居る、性質は極めて家族的で最も人に慣れ易い、且又表情は犬に似て濃やかであるから、何人に

も好かれる猫であるけれども、唯だ一つの缺點とも言ふべきは其聲が著ぢるしく濁つて居て、所謂猫的でないことである、●●●猫にして若し此濁れる聲を改めて清く且柔和な聲にしたならば、何程人に好かれるか判らないと思ふ、此猫は歐洲に於ても寵愛され又我國へも少々は來て居るが、何分熱帶産のことである爲にや、繁殖は甚だ困難である、外山博士と我輩は其●●●猫の子を貰ふ約束をしたけれども、遂に其希望は達せられず、外に又●●●猫の雌を有するものがあるから、之より雜種を得やうとしたが之れも遂に流産して、目的を果すことが出來なかつた、尤も英國に於ける猫通も之には餘程困難して居ると見え、遲羅より心配して親夫婦を取寄るよりも、英國に於て猫通が丹精して生せたる子猫を買へと言ふて居る。

二、●●●●●●●　アビシニャン種　此種の猫の性質は極めて●●●種に似て居るが、

何れかと言へば一層感情的である、其動作は柔順にして優雅であるから、飼養上趣味ある猫である、體は小さくして敏捷、顏は又小さくして其足は誠に愛らしい、而して其毛に於ける最も優秀なる點は、首部から背の中央部を經て、尾の尖端に至る迄て黑色の條を有することである、體色は赤鳶色と黑色との斑紋を有し其光澤は頗る美はしい。

三、●●●●●●●　青色短毛種　通常短毛露西亞種と稱して居るのは此猫で、此稱の起りし所以は英國其他の諸國に於て、夙く露西亞に見出されたからである、此猫は短毛族中にありて最も美はしきもの一として、愛猫家の寵愛を受て居る、毛色は其名の示す如くに帶青色の猫で其目が濃き橙色なるのが、著ぢるしく愛着を引く原因となつて居る、顏は廣く短かく且丸形であつて耳の大ならざるを貴び前肢は太くして短かいのが良い、而して此猫は短毛の斑猫の雌と黑き雄猫と

の雑種であると云ふことであるが、其故にや純粋の青色猫以外に種々なる毛色も差いて來るらしい、尙此猫に就て殊に小猫の時に注意すべきことは往々斑の徴候を顯はすことがあるのに驚いて、是を眞正の斑の小猫として棄てゝはならぬことである、無論五匹が五匹と云ふ譯ではないが、毛變りする時には、其斑の徴候は去りて、眞正にして且美はしき青色猫と爲るものが、少なくないのである。

●四、斑の短毛種　斑猫は其毛斑多種多様にして列擧するに堪へない、唯だ何れにしても臺色が鮮やかで其斑點又は斑理が綺麗であれば良いのである、顔の形や四肢等は普通愛せらるゝ處の條件に適つて居れば良し、又目の色は其臺色の模様や顔の毛の斑點により、良否を決せらるゝものであるから、一々擧げる迄もないことである、又彼の龜甲斑の如きは非常に綺麗に出るので、此種のものにありては遙かに波斯長毛族に優つて居る。

●五、マーン無尾猫　此猫は全く尾が無いのが此猫の特徴である、即ち尾の形は痕跡も無いのである、即ち昔は一種奇怪なる傳說がある、此猫に就て西班牙人が航海してマーン島に着した時に、此猫を發見して西班牙に持歸つてから歐洲に居るやうになつたと云ふのであるが、此猫に島の名を其儘附して居ることよりすれば、恐らくマーン島に產出したものであらう、此猫は極めて柔和なもので、猫同志は勿論のこと犬とも深く親しむものである、毛色には黑いのもあれば白いのもある、又此猫の最

マーン無尾猫

も良いのは臀部の成る可く丸いので、其他は一般猫風の愛らしくあればそれで良い、他に著ぢるしき標準とては無いのである。

六、黒色と白色短毛種　眞黒の猫も、眞白の猫も共に愛らしいものである、眞黒の猫には成る可く肉類を與へなければ其色が鳶色を呈して來る、眞黒の猫は鴉の如くに黒きこそ良けれ、鳶色を呈して來ては甚だ劣等となるは言ふを待たぬ、又眞白の猫も無論肉を澤山與ふる必要があるので、肉食せしめざれば其色澤を害するものである、又此猫は毛を汚す恐れがあるから飼養に就て餘程注意するが良い、而して眞黒の猫の目は黄金色なるを可とし眞白の猫の目は青色なるを崇とする、顔形や體格等は之亦愛らしき猫に要する條件を具して居れば良いのである。

以上述べたる處は歐洲に飼養されて居る處の猫に就て、其大體を抄錄したのであるが、之にて彼國猫界の事情を知ることが出來ると思ふ、而して是等の猫は我國にも來て居るものも少しはあり、又輸入を企てゝ居るものもあるから、今後盛に見得るでもあらうし、從つて其研究も容易に出來ることゝ信ずる、之より一轉して我日本猫に關して其毛の色や顔形等に就て陳述したいと思ふが、悲しいことには我輩未だ交雜によりて新種を出す法を實驗せず、即ち或種の毛色の猫は何れの雌雄によりて出來るものなりやを實驗せず、目下其研究の準備中であるから、其外國種猫に就ても其事を書かなかつた如くに、唯其毛色に就て少しく述ぶる處あり學理を實驗に徴したる後ち詳細に入るであらう。

我國の猫は即ち短毛族に屬するもので、縱令其毛に多少の長短はあるにしても何れも短毛族ならぬはない、而して其體格は普通短毛族の猫の特徴たる耳は大きくして裸である、又其顔には頗る丸く且短かくして廣いのもあれば楔形を爲し居るのもある、前者の標本としては我平●

太郎之に擬すべく、後者の標本としては之亦我彦次郎が適當して居る、胴には極めて丸い所謂胴丸猫あり（平太郎）極めて長い胴長猫（彦次郎）がある、尾も亦其通りで長いのもあり短かいのもありて一樣ではないけれども、併し如何に短かいものでも殆んど無尾に均しきものは無いのである、尤も曾て信州宮坂某の處で無尾に近い小猫を見たけれども、之とても矢張尾が極端に短かいと云ふ迄であつた、今試みに平太郎と彦次郎と彦次郎の親たる駒ちやんの顏や尾等を度つて見た處が左の如くに違つて居る。

名稱	體長	尾長	顏の大きさ
平太郎	一尺三寸	二寸七分	長二寸九分　幅三寸九分
彦次郎	一尺五寸	七寸五分	長二寸五分　幅三寸
駒ちやん	一尺四寸	七寸七分	長二寸五分　幅二寸八分

之にて一般を知り得るであらう、毛の生ひ方も色々くてサッパリとした毛もあれば又多少ムク〳〵とした毛の猫もある、目の色は概して黄褐色なれども又帶青橙黄色のもある、我彦次郎の目の如きは帶青橙黄色であるが、日本猫としては實に綺麗な目を有するものの一である。

日本猫には眞黒の外一色の猫は甚だ少ない、青色や煙色の如きは無論のこと、白色の猫も殆んど無いのである、或は白色のものは千に一頭位はあるかも知れぬが、先づ稀有のものとして差支はない最も多いのは白と黒の斑、白と黄褐色の虎、白と赤と黒の三毛、次でサバ猫と稱する鼠色の斑、眞黒等を普通にある猫とし、其他帶紫鼠色の猫や色々のものもあるけれども、上記の猫に比すれば殆んど數にはならぬ位である、而して三毛猫と白黒の猫とは斑點を爲し、白茶の虎猫とサバ猫と稱する鼠色猫は斑理を爲して居る、龜甲斑の如き氣の利いた猫は未だ一頭も居

ない、要するに日本猫は種々なる點に於て大なる改良を爲すべき餘地が十分にあると言はねばならぬ。

第二節　猫の勢態美に就て

凡ての生物は皆美はしい、而して茲に面白いことは萬の生物を通じて美はしきを好むこと並びに其好む處の其美の性質が共通して居るやうに見えることである、犬の美はしいのは犬も喜び又吾々人間も喜ぶ、猫の美はしいのは猫も喜び吾々人間も喜ぶ、即ち猫や犬自身が美はしいと思ふ處の毛の彩色や勢態は矢張我輩が見て以て美なりとする彩色や勢態に一致するらしい、斯く言ふ時は美の性質が犬猫と人間と共通する爲でなく、人間が自分の好む處の彩色や勢態を有するものゝみを撰擇し飼養するから、斯る物ばかり殘つて居るので斯樣に見えるとの異說もあらうけれども左れば

とて吾々人間は野に棲む孔雀に對して斯樣な色彩を持てと頼むだことはなし鴫や鴛鴦に對しても亦頼みもせず且撰擇したことの無のに、彼等が有する羽毛を彼等自身が美はしと思へる如くに吾々人間も美はしと感ずるより見ても、之には他に大なる力がありて互に美ならしめ、而して其美ならしむる力なるものは生殖に原因するので、人間も彼等生物も其美に關する感を同じうするのであらう、犬や猫の如き人間に愛養さるゝ家畜にありては人間の撰擇力も無論及ぶのであるが、又野棲の動物同樣彼等自身にも好配偶を得ると共に自己の種族を美ならしめんとする念があるのに據らなければならぬ、然らざれば辛うじて縱令家畜なる犬や猫のことは何とか解釋し能ふとするも、野棲の動物に對しては全く發言することが出來なくなると思ふ、見よ孔雀や鴛鴦には人力少しも及ばずして斯の如

くに美なるではないか。

外國種の美麗にして高價なる猫は暫く問はずとして、之を日本猫に於て見るに毛の色彩の目を掩ふ迄に醜くいものは甚だ少ないと言ふよりも、殆んど斯の如きものは居ないと言ふべきである、先づ虎猫の如き淡黄色の臺毛に濃黄褐色の斑理を爲すものサバ猫の如き鼠色の臺毛に黒色の斑理を爲すもの等に就て見るも、虎は虎なりに、サバはサバなりに、殆んど一絲亂れぬ迄に美はしき斑理を爲して居る、白き處は雪を欺く計りに純白にして美の最も主要部たる顔の如きは色の配合宜しきを得殊に目の廻はりが美はしく出來て居つて、自から愛着を引くやうに出來て居る、斑猫にしても其通りで色斑亂雑なるが如くにして亂雑ならず、黒色毛の多きものあり黒色の斑點を爲すものあり、白と黒と褐色の三色を配合するもの等あるは何人も知る處であるが、其配點の

醜を極めて居るものはない、顔の毛色は美はしく配合され、中には又鼻の先の黒いのもある、人間の赤鼻は醜くいけれども猫の鼻黒は愛らしいものである、少しも其美を害はずして却つて美を增すものである、之れ恐らく造化の妙用であらう、否彼等自身の生殖關係より來るもの大部分を占め、我輩が好む處の關係も加はりて斯くは美はしく配合さるゝのである、右の如くに彼等は美はしきもので又其美はしきを好むものであるが、之に就て一種不思議なることが其親猫によりて行はるゝのである、ふことである、駒ちやんに就て實驗したる談によれば、彼女は其醜くい毛色の小猫を喰ひ殺し又家人が某の小猫を醜くいと云へば之を喰殺すと云ふのであるが、後者は偶然の事とも言ひ得るけれども、偶然も數回に及べば何かの意義を生ずる、前者は全く何れの猫も爲す處であるから美はしからぬ小猫を世に出すは却て之に難儀をさせると思

ふ處の老婆心の發動であらう、何れにしても彼等が美を欲して醜を忌むことは明かなるべく又其美醜共に我輩の思ふ處と一致するのは面白いことである、猫は本來に於て美を欲することゝ斯の如きも捕鼠や防寒や又は孳尾等の關係からして其毛色を汚がすことがある、左れば猫を美はしく飼ふとするには第一竈の中抔に入る處の習慣をつけぬやうにし、毛は金櫛にて三日目に一度位は梳りてやるが良い、又餘りに汚れたる時には溫暖なる日に於て溫度九十二三度の湯にて洗ふてやるべしであるが、之を乾かすのに注意しなければ、猫は其沾れたる毛を以て轉げて歩くからして尙以て穢なくなる、若し湯で洗ふた場合には海綿にて能く水分を拭ひ取り、猫を繋いで置くべきである、併し成る可く洗はないで梳りてやる方が良いのである、以上は猫の美觀に大部分を占むる處の色斑の美であるが、其態勢に於ても決して醜いものではない、其蹲まる時には足を揃へて尾を捲き、其眠る時には丸くなつて居る、蹲まる時には所謂猫背となるけれども人間であればこそ猫背が醜くけれ、猫の猫背は誠に愛らしい、寢る時には時に隨分仕鱈の無い風を爲すこともあるけれども、之れ恐怖なき安樂境に於て寢て居ればこそ即ち猫の爲には極樂である、之を以て寢像が惡いとは言へぬ、要するに猫の色彩は飽く迄美術的であつて見るのも厭だと云ふやうなものは一匹も居ない、勢態も亦愛着を引くに適して居る、美はしき少女が小猫を懷けるを見よ、如何なる猫嫌ひの男も振り返りて見るであう、猫を見たのではない、乙女のみを見たと云ふのは一場の辯疏に過ぎぬ。

第三節　猫の性質と壽命

我國に於て愛憎交々至る動物が二種類ある、一は狐であつて、一は猫て

あることは何人も知る處であらう、而して此狐に就ては隨分佳話もあるけれども、猫に至ては悉く嘲罵憎惡で殆んど美談と云ふものはないのである、野棲動物たる狐は兎に角として、家畜として愛養さるゝ動物の中に猫程殘酷なる批評を受て居るものは無いと思ふ、之は實に猫の本性が正當に理解されて居ない爲めなので、誠に猫に對して同情すべきである。

一部の人々は猫の啼聲が癪に障ると云ひ、又猫は外面溫柔にして内心は猛惡であるから嫌ひだと云ふ、之は好き嫌ひのことであるから一概に論じ去ることは出來ないが、好な者から見れば其啼聲の柔和なる其外面の溫順なる皆之れ猫が愛せらるゝ所以に外ならぬ、而して猫は其本性に於て猛惡ではない、獅子も虎も何で本性が猛惡てあらうぞ、獅子や虎が其子供を連れて居るのを見よ、其處に無限の愛情と柔和が溢れて居るではないか、餌食を與ふる人に對しては獅子も虎も猫も皆友人である、子を愛して呉れる人に對しては獅子も虎も猫も皆恩人てある、人自から殘暴にして獅子の子を捕へ猫の子を奪はんとすればこそ、彼等は其愛情の發動の故に又其一身の防衛の故に爪牙を以て之を防ぎ敵する者に勝たんとはするのである、食ひ飽きて安らかに眠れる猫を見よ、何處に爪牙を出して身搆ひの氣勢を示せるぞ、平和は彼等の欲する處、飽食は彼等の欲する處、子は彼等の愛する處、之を妨げざる限り彼等は實に平和の天使である、然れども一旦彼等を忿激せしむれば實に獰猛の形相を爲すものである、併しながら之は決して本性ではない已を得ぬからである、獰猛なる點より言へば人類の方が更に強大である、刀劍銃砲は彼等の敵する處ではない、獅子如何に強大なりと雖も人間の造れる武器には適はない、猫の如きは小供てさへ捉へて川に投ずる

程に弱いものである、銃砲を以て抵抗する人間が猫を以て獰猛なりとし、直に之を好惡の料と爲すが如きは、餘りに沒分曉と言はねばならぬ、假りに數歩を讓りて彼等は獰猛なりとするも、之れ人間が斯く爲さしめたるものである、猛獸の猛なる原因に就て、ダーヴヰン氏の如きも人間が始めに追撃したから彼等は猛獸になつたと言ふて居られる、我輩も斯く信ずる者の一人である、先祖代々彼等が忿るやうにして置いて、忿りて爪牙を出して又彼等が爪牙を磨がねばならぬやうにして置いて、忿りて爪牙を出せば獰猛なりとするは道理に合ぬ、則ち人間の本性が柔和である如くに獅子も猫も皆本性は柔和である、獰猛なるは忿怒の狀態に於てのみ然りである、明治の人間に是位なことを知らぬ者はない筈であるけれども、往々にして前に述べたやうなことを耳にするから、特に一言して置く次第である、爪牙を有する猫を以て猛惡なりとする人は、銃砲を以て戰爭する人間を以て直に獰惡なりとする謬見を懷ける者である、次は猫の壽命であるが、之に就ては吾輩正確なことは斷言し得ない、併し吾輩の知り居る處を言へば、猫の壽命は長くとも二十年を出まいと思ふ今より五年前に死んだ處の茨城縣の一知人の猫は生後十九年目に死んだのである、此事は一般的な想像を以てすれば虛言のやうであるけれども、決して虛構な說ではない、則ち其知人の家には猫を貰ふて來た年に生れた子があるので、猫と子供とは年齡を均しうしつゝ成長したのである、而して其猫は彼が十九歳の時に死んだのであるから、此記事は正確である、且又其猫を飼育して居た處の知人の談によれば、十四五年目には全く齒が缺けて終ひ、人間で云へば七八十の婆樣のやうであつたが、それでも一四位宛の子供を產むだとのことである、之で見ると十二三年目の猫は少くとも人間の五六十に比すべき年輩であるけ

れども、毎年一二頭宛の子供を生むだと云ふことであるから、猫の老衰期は案外遲いものと言はねばならぬ、猫の成人するのは生後六ヶ月目で辜尾期に入るのは十二ヶ月であるから、世人が唱ふる如くに動物の年齢は色情發生期の五倍であるとすれば、猫の年齢は五歳長くとも七八歳が普通であらう、併しながら前述の如き十九歳と云ふ猫は稀有のものとしても、十歳に達した猫は決して稀ならず、又十三四歳の猫も多少は有るのであるから、猫は極めて短命の動物であるとは言へぬ、殊に色情發生期説よりすれば、人間の定命は約七十五歳であるから、猫の五歳は人間の七十五歳と見るべきであらうが、兎に角七八歳乃至十歳と云ふ年輩の猫は隨分多いことであるから、此説は猫に對しては當箝らない況や十九歳と云ふ老猫も有つたことであつて見れば、人間で言へば眞實の八百比丘尼同樣である、否比較的年齢は人間よりも猫の方が

遙かに長命であると言はねばならぬ。

玆に一個猫に關する疑問がある、それは猫が死亡する時は多く其死顏を家人に見せぬと云ふことである、此説は實驗の上からも此傾きがあるやうに思はれるし、又西洋の著述にも此事實あるを記述してある、尤も或る愛猫家は自分の宅にては斯る事實あるを見ず却て自分の側に來て死んだと言ふて居られるけれども、併し多くの人々は死顏を見せずと云ひ又西洋に於ても斯樣な事實あることを述べてあるとすれば、兎に角之が猫の性質かも知れぬ、我輩は此説に對して眞僞の説を立つることは出來ないけれども、此前死んだ處の花と云ふ雌猫には慥かに其傾きがあつた、即ち花は其死する三日程前から人家離れた畠に行つて靜かに死の到るのを待つて居た、之で見ると彼説は眞實のものゝやうに思へるが、又其反對の側から考へて見ると多少の異説を挾むこと

も出來るのである即ち花に少しく遲れて死んだ處の雄猫の平太郎は其寢室に於て病を治療しつゝあつたが病勢は日々募るばかり卵と牛乳とによりて僅に其餘命を繋いて居た時にも、其大小便の爲に其寢所をよろめきながら出て必ず庭に降るのであつた、而して其姿は實に憐れなもので又其心氣の終り迄健全なのに驚くと同時に一種の感慨に打れざるを得なかつたのである、此事は我輩に取て悲しき紀念である、が此事實によりて彼の死顏を見せぬと云ふことを考へると、又次の如くに言ふことが出來る、猫は如何に衰弱するとも糞便の爲に外に出やうとするものであるから、未だ衰弱の極に達せざる時に家を出て又は椽の下等に入るが故に、家人も其死顏を見ることが出來ないのである、と、思ふに此說も亦强ち無稽のものではあるまい、猫は果して死顏を見するを好まざる性質を有するものであるか、又家人が死顏を見る能はざる處のものであるか、之に就ては我輩は唯だ一種の疑問として置くより外はないのである。

要するに猫の本性は極めて柔和なもので其獰猛なるは恐怒の狀態に於てのみである、又其壽命は比較的に長命な家畜と言はねばならぬ、前述の死顏云々のことは容易に斷言すべき性質のものではない、又年を切て貰うて來ると其年限には必ず居なくなると云ひ、三頭迄實驗したと云ふ者もあれど、之等は須らく一疑問として揭げ置き識者の明敎を仰ぐであらう。

第四節　猫の毛色と雌雄

猫の毛色に種々あることは前節に於て述て置いたが、日本種の猫に就て其毛色と雌雄との關係を調べて見ると、虎猫には雌が少なくして、雄

が多く三毛猫には雄が少なくして雌が多く、又黒猫には雄多くして雌が少なかつた、勿論之は數年來各地に旅行しては、其飼猫に就て調べたものであるから、果して正確なりや否やは保證されないけれども、知人の家に生れた猫に就て調べたものが十一戸四拾二頭是亦前に言ひし雌雄關係の異ならぬ處を以てすれば、何かの原因で斯樣な傾きになるのかも知れぬ、今我輩が調査したる三百五十八頭の猫に就て、其毛色と雌雄との關係を表示して見やう

毛色別	雌猫	雄猫	計
虎猫(白茶二色)	一八	一〇三	一二一
三毛猫(白茶黒三色)	八六	四	九〇
熊猫(純黒一色)	五	三八	四三
斑猫(黒白二色)	五九	四五	一〇四
計	一七八	一八〇	三五八

隨地各所で不規則に調べたのであるが、前表によれば虎猫百二十一頭の中には雌が十八頭なるに雄は百〇三頭あり、三毛猫には其反對に雌雄合して九十頭中雌八十六頭で雄は僅に四頭しか無い、熊猫は奇なる事實を示して四十三頭中雌が五頭雄が三十八頭である、白と黒との斑猫に至ては雌雄殆んど同一であるが、比較的に雄の少ないのは調査事情によるか、然らざれば雄は鼠を捕らぬからして飼育者が少ないのに由るのであらう勿論此少數の而も不規則なる調査のことであるからして正を得たりとは言へぬが、左れど俗間唱ふる處の三毛猫には雄が少なく虎猫には雌が少ないとの俚語に顧みても、又左まで誤まつて居ないやうにも思はれるのである、夫から又誰に聞いて見ても三毛猫は大抵雌で虎猫は大抵雄であると言ふて居る、此事實は獨り我國産の猫

のみではない、西洋の猫に於ても同樣の結果を現はして居ると云ふことであるのを見るも、前に掲げたる所の表數は縱令比例上の差異があるにしても、又實數上の違ひがあるにしても、虎猫には雄が多く、三毛猫には雌が多く、眞ッ黒の熊猫には雄が多いと云ふこと丈は證據立ることが出來ると思ふ、然らば其原因如何、何故に斯る事實を現はすかに就ては、我輩恥かしながら之を論定するの智識が無い、否多少の理窟も言ひ得ぬでもないが暫く疑問として篤學の士の明敎を待つ。

第五節　猫の雌雄及び毛色と捕鼠

猫として鼠を捕らぬはない、巧拙はあらう、多少はあらう、左れど少しも鼠を捕らぬ猫はあるものではない、猫は或る意味に於て最良なる捕鼠器と稱すべきである、左りながら我輩の實驗によれば飼養によりて全く其性慾を減却せしむることも出來るし、現今歐米に珍重がられて居る長毛族の猫の如きは初めより其機能を欠いて居ると言ふべしである、此初めより鼠を捕ぬ樣になつて居る猫は別問題として、玆には先づ如何なる猫が能く鼠を捕るかを言はう、雌雄と捕鼠、其毛色と捕鼠、漠然ながらも言ひ別つことが出來るやうに思はれる。

捕鼠の性を滅却せしめた猫は別として、處々で百七十四頭の猫に就て其色を調べ又雌雄と捕鼠の巧拙を聞いて見た結果によれば鼠を最も能く捕るのは三毛の雌猫と白黑の雄猫で、鼠を捕らぬのは虎の雄猫と白黑の雄猫である、眞ッ黑の雌猫に就て又其他雜色の猫に就ては、調査を欠いて居るから一概に言ひ去ることは出來ないが、比較的に最も多く居る處の猫に就ての調査であつて見れば、猫を撰擇するのに多少の參考となるであらう、而して純白の猫は殆んど無く三毛

第五節　猫の雌雄及び毛色と捕鼠

の雄猫の如きは神聖なものとして居るから、鼠を捕るが如きは問題とはならぬ

三毛の雌猫に就ては……四〇

一、鼠を能く捕ると云ふもの……四〇

二、鼠を捕らぬと云ふもの……五

眞黒の雄猫に就ては

一、鼠を能く捕ると云ふもの……二〇

二、鼠を捕らぬと云ふもの……四

白黒の雌猫に就ては……四九

一、鼠を能く捕ると云ふもの……四九

二、鼠を捕らぬと云ふもの……九

虎の雄猫に就ては

一、鼠を能く捕ると云ふもの……六

二、鼠を捕らぬと云ふもの……一八

白黒の雄猫に就ては

一、鼠を能く捕ると云ふもの……八

二、鼠を捕らぬと云ふもの……一五

右の如き結果となるのであるが、比例を求むれば各猫に於て大なる差を生ずる、則ち前表によりて見れば捕鼠用としては、虎の雄猫と白黒の雄猫の如きは實に役に立ぬ猫で、又鼠を捕ると云ふ猫では三毛の雌猫が一番良い、眞黒の雄猫と白黒の雌猫とは伯仲の間に居るが、之を以て直に猫の品位を決定することは出來ない、何故なれば此調査には其飼養の方法と年齢との調査を欠いて居るからである、併し世間一般に唱ふる處の雌猫は雄猫よりも良く鼠を捕り三毛猫と眞黒の猫とは之亦

良く鼠を捕ると言ふに比して、一致する處もあるからには又以て大體の標準とはなるであらう、又或學者は黒猫は一番能く鼠を捕ると言はれたが根據を何れに置いての話か知らないけれども、我輩の調査の上より且自分の家に居る黒猫の動作の上より、強ち架空の想像ではないやうに思はれる、尤も愛翫用として猫を飼ふならば、波斯の長毛屬最も宜しかるべく、我日本種としては毛並の美しい雄猫が良からう、純白の猫は鐘と太鼓にて捜しても飼養すべく、三毛の雄猫亦神聖視しても良からうが、虎猫の雌は殆んど鐘と太鼓ものなるに拘はらず之を愛翫せざるは聊か偏頗な處置と言はねばならぬ、是等のことは兎に角として我國の如くに一般の猫に價値のない今日此頃では、少々鼠捕りが鈍くても美はしい雄猫を飼ふが良い、之は見て美はしく子を産まぬからして其始末をしてやる世話もない、捕鼠用としては子を産む世話がある

にしても無論雌猫である、併し眞黒の熊猫は美はしくもあり且つ捕鼠も先づ巧みな方であるから、一擧兩得な猫と云ふべしてある。

第六節　猫の捕鼠性減滅及び增進

猫は先天的に鼠を捕る動物である、然るに我輩は飼養によりて此先天的なる捕鼠性を減却せしめて、全く形丈の猫にすることが出來る、之には雌雄の別も又毛色の區別もない、如何なる猫でも同一に其性質を減却せしむることが出來るのである、過る三十九年の春我輩が貰ふて來た處の、花子と云ふ灰黒色の雌猫と、久子と云ふ白黒の雌猫と、藤子と云ふ三毛の雌猫と、虎の平太郎と云ふ雄猫とは、皮膚病に感染して死する迄存命一年半に及むだが、遂に一匹の鼠をも捕ることなく、又捕らんともしないで、哀れ歸らぬ旅路に上つたが、彼等も猫である以上は、殊に

其親は皆巧みに鼠を捕る名手であるのに、而して彼等も之を食へば甘いと云ふことを知りながら、何故に其第一の好物たる鼠を捕ることを思はなかつたか、之には實に仔細がある、全く飼養法によりて得たる結果である、其頃我輩の住むて居た處は、其隣家は魚屋であり、且近隣には人家櫛比して居ることてあるから四匹の猫を携へては心配でならぬ、そこて成る可く飽食せしめて他の家の食を貪ぼらぬやうにと心掛け、肴屋と約束して一日十五錢宛の猫用魚肉を注文した時によると大皿に一杯もある、四匹の猫は朝より夜に至る迄て三食魚類を見ざるなしで、我輩の如き者の猫としては先以て贅を盡したものである、況や時々牛豚の肉を御馳走せらるゝに於てをやてある、而して我輩は之により て第一の目的たる他の家の魚肉等を狙ふこと丈はさせないやうにしたが、之と同時に彼等をして全く食慾上の要求なきに至らしめた、彼等

は朝より寝るばかりてある、目が覺むれば四匹が走り廻はり、腹中の消化を速かならしめ、又盛に食つて眠るのてある、而して其眠る時には四匹が上になり下になりして互に暖を取つて居る、二階に鼠の音がしやうと、臺所に鼠が來ようとお構ひなしてある、鼠も亦猫が自分等を害せぬことを知りてか、公にやつて來る、事によると猫が寝て居る處の座敷にも入て來たことがある、而も猫は四頭共に惰眠を貪ぼつて居る計りてあつた甚だしきは我輩一日生きたる鼠を金網の中に入れて數尺の處に置いたのに、唯だ平太郎が少しく注意したのみで外のは知らぬ顔で居り、平太郎も亦其眠りに就て終うた、我輩は之を見て實に一種の感に打たれざるを得なかつた、然らば鼠の味に興味と甘味とを感ぜるかと云ふに決して左樣ではない、鼠を貰ふて來て之を分配してやれば其嬉しがることは一方ではない、唯だ彼等は與ふる物を食ふに滿足して、

自ら甘味を取らんとするの念が無くなつたのである、此事實即ち猫の捕鼠性滅却は取も直さず、我輩が他家に於て盜みをさせまいとの婆心から出來たことで、實は思はぬ結果を得たのである、斯く迄にならうとは思はなかつたのが、餘りに其變化の大なるに驚かざるを得なかつた次第である。

日本種平太郎(虎の雄猫)

人爲的に彼等の食慾本能を滿足せしむれば、彼等は全く其性質の一部を變更するものである、則ち尋常ならば必ず鼠を捕る、他の家の魚肉は盜まずとも鼠は必ず捕へんとするものなるに我輩の猫四頭は全く其性を缺き、鼠の跳梁に委し猫としての役目を全く盡さぬやうになつた、勿論斯ることは一時の狀態であらうが、併し京地を去つて郊外田端村の田園に移つてからも四頭の猫は矢張鼠に就て何の興味も持たなかつた尤も田端に移りて僅々三ケ月にして皮膚病に侵されて斃れたから、天性に復歸する時間が無かつたのであらうと思ふが、何にしても彼の四頭の猫は一匹の鼠を捕らず又捕ふともしないで斃れたのは注意すべきである、此經驗の示す處により我輩は飼養上の手續により多少猫の食慾本能に變化を與ふることが出來、又其反對なる方法により非常に能く鼠を捕るやうにすることが出來ると思ふ、況や猫の性は鼠を捕ることを好むものであるから、其捕鼠本能を發揮せしむるには所謂他食暖衣ならしめざれば良い今居る處の虎の平太郎は初め他食暖衣せしめたので、少しも鼠に就て興味を感ぜざりしも、其天性復歸のこと

を調査せんが爲めに食物に多少の斟酌を加へたりしに、今日では捕鼠の性を現じ來り、鼠の來さうな處に蹲まつて靜かに其來るを待つて居る、而して折々鼠を捕つて來るやうになつたのである、併し何と云ふても三歳の若雄猫であるから、捕鼠猫としては甚だ價値がない、其後に貰ふて來た處の眞黒の彦次郎は中々の名人で、一日に四頭も取つて來ることがある、之を以て見る時は食物と捕鼠性とは大なる關係を有することが判然することである、然らば或猫に鼠を捕らしむるには食物を減じ美食せしめざれば良いかと云ふに決して左樣ではない、若し極端に食物を制する時は、全く鼠を捕らぬやうになる、況や之によりて鼠を能く捕る處の猫を出さんとするに於てをやである。

猫に鼠を捕らしむるには餘りに飽食させぬ方が良いとは、前既に陳述したる如くであるが白河樂翁の如き賢明なる人でさへも、猫を飼ふには麥飯に限る之でなければ鼠を捕らぬと言ふて居る樂翁時代の猫は兎に角として今日の猫は決して麥飯を以て滿足するものではない、如何なる田舍の猫でも鮮位なものは與へて居るので、又鮮は非常なる御馳走ではないのである、然るに世間には御馳走は愚なこと一層食物を與へぬ方が能く鼠を捕ると思ふて居るものがある、斯く如く信じて居るものは、獨り日本に於てのみならず、歐米諸國にも多くあるやうであるが、之は大なる誤謬であつて斯くすれば却て鼠を捕らぬやうになるのである、則ち飢餓に迫れる猫は身體が疲勞して居るから鼠を捕る爲に長時間忍むで居るの根氣なく、鼠を捕りて空腹を滿さんよりは他の物にて滿さうとするものであるから働いて甘味に飽くよりも、盜むで先づ粗食でも空腹を凌ぐに至るのである、世の誤解者流は猫が鼠を捕らぬのを以て一に飽食に歸し、或は食なき土藏に連れて行つて二三日

に及び又は食物を與へずに置くけれども、之は尚更鼠を捕らぬやうにし、却て食物を盜ましむる樣に導くものである、猫は餘りに美味を飽食せしむれば鼠を捕らぬものであるけれども、極端に食物を與へなければ又鼠を捕らぬやうになるのである、次は鼠を能く捕る處の性質の猫を出すことであるが、之は成る可く母親の捕鼠性を能く調べて其子を貰ふに限る、由來養蠶と猫とは密接の關係を有つて居るが、其毛色や雌雄の如何を問はないで、養蠶地方の猫は能く鼠を捕るやうてある、之は養蠶地方の人々は猫の子を貰ふのに先づ親の鼠捕性を聞き糺して貰ふことであるから、自然と能く鼠を捕ることの上手なもののみ殘り行くので、養蠶地方の猫は比較的に能く鼠を捕るやうになるのに違ひない、即ち養蠶地方に於ては毛並や雌雄のことは大なる問題とはならぬ、唯だ鼠さへ能く捕れば上等猫とするのであるから、斯る結果を來したのであらう兎に角鼠を上手に捕る猫を得るには飢えず飽かず極めて平和に育てられたる其上に、捕鼠の嗜みの十分ある母親が産むだものを撰ぶに限る、而して其飼養法を前述の如くにし、中庸な生活を營ましむべきてある。

心理學の發達すると共に人間の虐待と動物の虐待とは同一てあることが證明された、子供六七歳より八九歳に至る迄は蜻蛉や蟬を捕へ十二三歳にして雀の巢を狙ひ又は猫の子を虐ぐる十五六歳にして犬の子を引摺廻はし十七八歳にして兄弟と爭ひ友達を苦しめ、二十三十となるに從つて幼少より得たる虐待の快感が第二の天性となりて益々發達し、主人となりては傭人を酷使し同胞と乖離するやうになる、凡そ惡人は幼少の時に小動物を虐待したる者てある、則ち虐待と云ふことは自分の手に合ふものを酷くするものであるから、八九歳の小供が蜻蛉を苦しめて快と思ふのも、三十の男盛りが傭人や同胞を虐待するのも、皆同一心根に發するものてある、見渡せば世間の親達は小供の爲に蜻蛉を捕り絲にて繋ぎて與へ、龜や蟹の甲を縛りて小供の翫弄物にして居るが、之れ無心の小供に虐待の罪惡を敎うるもので、取も直さず、汝成長しなば傭人を苦しめよ、要を酷使せよ、老人を虐待せよと無言の敎育を爲しつゝあるに外ならぬ……時事新報……著者述。

第二章　猫の日常生活

第一節　猫と家

猫は人よりも家に親む家畜である、如何に愛しても人に親まぬと云ふので猫嫌ひの人々から悪ざまに言はれるのであるが、我輩の實驗によりても多少其傾きがある、即ち人よりも家を大切に思ふ動物であると云ふことは、爭ふことが出來ないやうである。

猫を一室に置いて唆つて見ると、猫は大なる恐怖の念を起して、其大敵の毒手から免れやうとする、然るに彼は家人の膝に來りて援助を求むることを爲さず室の周圍を廻はりて逃げ場所を求むるものである、唆る聲は我輩より出て、呼ぶ聲は女性より出てても、尙其呼ぶ所の女性によりて助けられんとはせず、逃げ廻るものである、之れ何故であるか、思ふに猫の目からは恐る可き大敵となつたと思ふのであるか、但しは叱責せられて居ると思ふのであるか、兎に角家人によりて救ひられるを欲せずして、自ら逃路を捜さんとするのは事實である、是は兎に角家人が敵の眞似をした時のことであるが他から迫害された時にも矢張家人の手に來らずして、家の一隅にて遁れんとする傾きがある、之は猫飼養者の洽ねく知る所であらう。

猫が家人よりも家を愛する心の厚きは、猫を懐に入れて門を出て見れば剣る、家人が其猫を抱いて邸内を散歩して居る間は何の事も無いが、一旦門を出づれば大騒ぎて、其門を出づることを欲せず、其邸に歸らんことを欲する情は實に能く現はれるものである、彼等は懐に在りながら少しも安心しない、如何に平生愛して呉れる家人の懐に在りても、大騒ぎに騒ぐものである、併し之は他に捨てられると思ふてからのことである。

かも知れぬ、又斯様な想像も出來ぬでも無いが、更に一層適切な例を以てすれば、家を轉ずる時が最も良い、即ち家道具を悉く片附ける荷物となりて他に運ばれる、而して自分等の食器も皆收められて、家には一物も殘さぬやうになつても、尙彼等は其家に殘るを欲して、決して伴はれて行かうとはしない、漸く彼等を懷にして門を出づれば、矢張行くまいとして騒ぐのである、扨て道中騒がせながら其新たなる家に着き、其儘家に放てば何れにか往つて終ふのも出來る、片着萬端終る迄で押入に てもも入れて置き、後ち其食器に肉でも入れてやれば、始めて落着いて其家を家とする、併し是等は極めて普通な猫で、中には何うしても其家に落着かないで、元棲み慣れし家を捜しに行き、其家が發見さるゝと否とを問はず、終に歸らぬものもある、我輩の處に居る彦次郎と云ふ猫は、我輩が不忍池畔の茅舍より十數丁を距てたる地へ轉宅した時に、其家を

逃げ出してから五日間を經て、元居りし池の端へ歸つたのである、幸ひ此家には尙家人が居たから良つたなれど、若し空家であつたならば其儘浮浪して泥棒猫と爲つたであらう、愚かなりと言はゞ言ひ得るであらうが、猫は其住み慣れたる家を去るを好まぬ性質だから仕方がない。然れども我輩の處に居る處の、今の平太郎は除外例の猫で、嘗て盜まれて行つて其儘に住み慣れ、數丁向ふの家なるに歸らうともしなかつた、一日我輩其家の前を通りて平太郎なるを認め、家人をして取戻しにやつたが、流石に其呼聲に覺えがあつたと見え『平太郎や』と云ふ聲に連れて返事をしたので右の猫泥棒も之に閉口したさうである、又茲に面白きは平太郎が三ヶ月にして尙我輩の家を覺えて居たことである、歸つたら馳走をしやうと待つて居る處に平太郎は歸つて來たので其儘玄關に卸させた、然るに未だ肉臭もさせぬに、彼は急いで勝手に行き、

掌て自分が食を採りし處で食事をした、彼は又門を出るにも騒がず、三丁や五丁は懐に入りて出て行く平太郎、否夫よりも隣家に連れ行つて置けば、其儘歸ることを忘れる處の平太郎が、三ケ月の後に至つて尚其舊慮を知りしと云ふは趣味あることてある、亦た以て彼等が家に親むの證ともなるてあらう、左りながら猫は絶對的に人をば記憶せぬ動物ではない、平生愛する人と虐ぐる人とは能く知つて居る、又自分の家人と外來の人とは微かながらも辯別する、加之足音にて能く其家人たるを知るものてある、我輩一ケ月間他より歸る度毎に魚類を持ち歸りしに、彼等は皆打揃ふて迎へに出た、又以て家人を知るの證となるてあらう、殊に平太郎が三ケ月の後に於て人の聲を理解したのを以てするも猫は強ち家にのみ親みて、家人に親まざる動物てあるとは言へぬ、殊に平太郎は、友人の所望によりて約一ケ月間貸して置いたが、之を自分

等が轉宅したる即ち平太郎が少しも知らぬ家に連れ戻りたるに、當時擧尾期てあつた爲に、其連歸りたる夜何れかに行つたので、今度は迚も歸るまいと思ふて居た處が五日の後歸つて來たのを以てすれば、猫は能く家人を覺え之に親しみて居る動物てあると云ふことが出來る、絶對的に猫は人に馴れても親しまずと云ふは誤りてある、併し犬に比すれば其度に淺深あるは疑はれまい、而して猫は何れかと言へば家には深くして人には淺い傾きがある、而も彼等が其家を愛する情の深きは取も直さず其昔穴居の俤を現はすものて餌物を捕れば必ず持歸るのと同一根底に基くものてある、猫を以て人に敵すると云ふが如きは、誣ゆるの甚だしきものと思ふ、又俗話に言ふ處の猫は其飼主が死ねば、地獄の釜の火を強くする云々も、家には深くして人に親しむことの比較的に淺いのに原因した誹謗てあらう。

第二節　猫と食物

猫は言ふ迄もなく肉食動物であるが又穀物の煮たるをも喜んで食ふことは何人も知る處である、歐米の如くに猫を極めて貴族的に飼育して居る處では、或は牛肉を與へ、牛肉のスープを與へ、其他色々の高價な滋養物を與へて居るけれども、我國一般の猫飼育者にありては鰹節の削つたのを御飯にかけて與へるのが普通で、稍々上等の部に於て魚類又は牛乳を與へる位のものである、勿論富豪貴顯の家に飼はれて居る猫は牛豚の肉に飽いて居るであらうが、之は誠に少ないことであらう、扨て吾々が普通與へる處の魚肉や牛乳の類は猫に對して何程の効能があるかを調べて見るに、無論有益なる食物であるが牛豚肉と同樣には大なる効能が無いと云ふことである則ち倫敦出版の一著書によれば、魚肉には肉食動物の體質上必要缺く可からざる鑛物性の鹽分や其他の成分を含有することが少ない、其故に猫に常食として魚肉のみを與へて置くならば、必ず貧血症を起こすこと往々にしてあり、左なくとも皮膚病に犯さると書いてある、我國古來からの言ひ傳へに於ても魚類を除りに食はすと腫物が出來るとあるが、之に就ては我輩の實驗と能く一致するのである、又其著書には成人したる猫に多量の牛乳を與へるのは甚だ宜しくない、其故は常に流動性の食物を與へる時は食慾上多量に飲まねばならぬ結果として胃擴張を起し、遂に營養不良に陷ると云ふのである、之も尤ものやうに思はれる、外國の著書に據り今少し詳細に述べて猫飼養者の參考に供して置かう。

猫は肉食動物に屬するものであるから、野菜は全く不必要であると云ふ人もあれど、經驗家の說に據るも亦我輩の實驗より言ふも之れ誤り

である、則ち一週間に二回は新鮮なる野菜を牛肉及びスープと混して與へるが良い、之れ胃腸の消化を助け便通を能くするに必要なからである、魚肉は決して生の儘與へてはならぬ、鹽肉、鹽魚、干物等も少量なる有害ではないが、多量に過ぐる時は皮膚病に罹さるゝの恐れあれば、先づ避くべきである、而して猫には是非一週間に二回の生肉を與ふる必要がある、若し猫が鼠や鳥を捕へ得なかつたならば毛皮の着いて居る兎の肉を與へるが良い、蓋し此毛皮或は鳥の羽根等は猫の胃や腸に特別なる働きを爲さしむるもので、猫の爲めには最も有益な食物である、世間には鼠や雀を料理して與へるものもあるが、之は實に馬鹿氣たことと言はねばならぬ。

猫が病氣に罹つて食慾不進の狀態に陷ゐつた場合には、新鮮なる雀の肉を與へるが良い、雀は食慾を興進せしむるに効果があつて、爲に病氣

の恢復の基となることもある、併し雀は捕獲するのに困難であるから、雀に代ゆるに鼠を以てするも宜しい。

猫の飼養に要する費用を節する目的からでもあらうが動物の肺臟や氣管抔を與へるものがあるけれども之は決して効能の多いものではない、併し羊の肝臟ならば一旦煮沸して他の肉類と共に與へる時には食慾を増進するものである。

牛乳に少量の砂糖を混じて與ふる時は毛皮を美麗ならしむるに著しき効能がある、而して如何なる物を與ふるにもせよ食器は極めて綺麗にして置く可きである、若し汚れて居るのを其儘にして置く時は其飼猫にして若し綺麗好きなものであるならば感情を害するであらう。之によりて我輩は猫が鼠を捕りて毛皮と共に食ふのは生理上の必要から來るものであることを知り、生魚を多く食はして皮膚病に罹らし

めた經驗によりて其不可なることを證し得た、唯だ如何にしても我國の猫事情に合はぬのは鳥を其儘食はしむることである、鳥雀の味を知らさなくとも猫は捕りたげにするもので、之に就て我輩は一種の經驗を持つて居るが、夫は綿製の尾羽計り鷄の羽根の着いて居る翫弄物を買つて來て之を猫の前に置きたるに、猫は之を喰へて唸りながら何うしても離さなかつた、之れ恐らく尾羽根に一種言ふ可からざる甘い香ひがしたからであらうが、兎に角猫の性質と云ふものは斯樣なもので あるから、之に鳥類を與ふることは今日の猫飼養法にては大禁物と言はねばならぬ、尤も十分に訓練して雞雛其他飼養禽類を捕らぬやうにしてあれば格別であるが、先づ危きに近よらしめぬのが第一であらうと信ずる。

小猫養育の注意に就ても却々行屆いたことが書いてある、則ち親猫が

子猫に哺乳する中は一日に六回以上食物を與へよと云ひ、子猫に歯が生へたならば少量の肉類を與へよと注意してある、而して更に一歩を進めて曰く子猫の視力の鈍いのは日光と新鮮なる空氣の缺乏に原因することが多い、左れば苟くも歩行の出來るやうに發育したならば務めて光線の透入する室に連れて來るが良い、然れども未だ歩行の自由ならざる哺乳期間に於ては度々子猫を見たり又接近する時は、人の見ない處に連れて行くものであるから、成る可く子猫が歩行の自由になる迄て見たがらないで靜にして置くが良い又流動性の食物に就ては之にて滿腹せしむるは宜しくない、流動物縱令ば牛乳の如きものを多量に與ふる時は胃擴張症に罹るのみならず之が爲めに腸虫を發生せしむることがある、且又子猫養育上最も注意すべきことは蚤の發生である、蚤は子猫の安眠を妨げ且血液を吸收するものであるから、爲めに

子猫をして貧血症に陥らしめ甚だしく衰弱せしむるものである、蚤を豫防するには其箱内を綺麗に掃除するは勿論、藥品豫防としてはステール氏散藥を用ふるが第一だと述べてある、之等は實に適當な注意書きで何人も實行することが出來る、則ち子猫が小さい時には親に澤山の滋養分を與へ、其親が食物を噛みて與へるやうになれば、細かに碎いた肉類を少し宛與へれば良いのである、而して又猫の産室を綺麗にしてやり光線の透入するやうにすべきは一擧手の勞に過ぎない、之ならば我が猫に對しても十分に出來ると思ふ。

第三節　猫の食餌法

食物上猫の最も好むものは無論鼠である、否鼠と云ふよりも凡ての肉類は皆好みて食ふことは言ふ迄もないが、俗話にも猫に木天蓼とある如くに、植物性のものに於ては最も之を好むやうである、由來此木天蓼と云ふ植物は深山に生ずる一灌木で、中夏の候梅花に似たる花を開き樓の如き實を結ぶものである、昔より猫の藥と稱せられて居る、藥種屋に行けば粉末としたのが賣てある、我輩嘗て此木天蓼を四頭の猫に與へて見ると何れも大喜びに食べたが唯だ久と云ふ雌猫は食はなかつた、それから彼等の孳尾期に於て之を與へた處が其喜びは非常のもので、躰を其粉の上に磨り着け、一種快感に堪へざる風を爲して居た、我輩の如き醫學上の素養なき者には確固たることは言へぬが、木天蓼は恐らく一種の催春藥ではあるまいか、少くとも興奮劑たるに相違ないと思はれた扨て話が多少岐路に入つたが玆に食物上の奇觀として述べたいのは猫の嗜好物に關することではなく、或物を食ふについての動作である、之に就て我輩は一種の面白いことを見た、猫に彼等が好む

所の肉類を與へるならば、如何にも嬉れしそうな風をして食べるのは、何人も知る所である、然るに一片の肉を與へた時と首尾揃ふた魚類又は畜類を與へた時とは、其嬉しさの表情が又格別に異なるものである、如何に甘い物でも切身として與ふる時は、直に食ひ終るものであるが、假令鰯の干物でも首尾揃ふたものを與ふる時は、如何にも嬉しそうな風をなし、暫時は眺めたり弄むだりして、後ち徐ろに頭から食ふのである、頭の方が甘いのか但しは頭を食へば其死命を制するを得るとの觀念からか、其邊の事は能く判らないが、首尾揃ふたものを與へれば、必ず頭から食ふものである、但し目差類の如き頭に肉の無いものは、頭は殘して置く傾きがある、而して斯の如きは獨り我輩の猫のみでなく何れの猫も同じことであらう、次に逃ぶ可きは猫が自分の得たる食物は必ず家に持歸る性質を有することである、鼠を捕れば無論のこと、人の家

の魚肉を盜むだ場合にも必ず持つて歸るものである、之れ恐らく食物を得たるが故に家人に誇らんとの功名心からのみではない、我輩の見る所を以てすれば、彼等が必ず持歸るのは其昔彼等の原猫が野に在り時代に、食物は一旦穴に持歸り而して後ち食ふた所の習性が今も尙殘つて居るものと理解される、そうでなければ盜むだ物迄持歸る理由がない、彼等も盜みの惡しきことは知つて居るのであるから、必ず誰にも秘して食ふ可き筈なるに、然はせずして一旦家に持歸るのは功名心の發動ではなく、全く穴居時代の習性が遺留して居るからであらう、蜻蛉でも蛙でも捕れば必ず持歸り、友猫でもあるならば態々危險に逢ふのである、而も此危險をも省みず、其渦中に入り捕られまいとて唸り居るに至つては、聊か不思議ながら、昔の性の發動と思へば何でもない、又斯様に解釋せねば到底理解することが出來ないのである。

第四節　猫の睡眠と小供

猫は能く寝る動物である、別て食慾本能に満足を與へてある猫は、殆んど寝てばかり居るものである、猫の睡眠時間は幾何であるか、之に就ては正確に言ふことは出來ぬけれども、我輩の猫により觀察するに、少くとも十時間に及び、長い時は十五時間にも達するものである、而して小猫は熟眠するけれども、成人したる猫が眠むるのは極めて淺く且つ斷續的なもので熟眠して起きると言ふのてなく、時々眠つて極めて淺く眠るのである、そこで我輩は如何なる程度に眠つて居るかを調べたいと思ひ、平太郎が極めて能く眠つて居ると見えた時に、四間を隔てゝ低き聲にて舌打をして見たのに、彼は耳を聳てた、三間の時には眼を開き五間の時には殆んど其聲が聞えなかつた、それから今度は彼等が熟眠中にも臭官は能く働いて居るか否かを調べると、二間隔つた處では我輩の持てる魚類に就て何の感じもなく、一間でも亦何のことも無かつたが、半間の處に靜かに持つて行くと鼻を動かしつゝ直に起き出した、之を以て見ると猫の臭官は眠中と雖も、十分働いて居るので、又其眠りも非常に淺いものてあることが判る、扨て此淺き眠りを爲すは何故であるか、無論之は敵の防禦に備へんとするはやの間になりて、十分目が覺めて居るやうにする用意であらう、既に猫の眠りは前述の如くに淺いものであるから、是非共長時間眠らねばならぬ、之は猫に限つたことはなく、犬でも同じことで、或學者の如きは空腹と睡眠不足と何れか害を爲すかを犬に就て調べて見たが、果して空腹よりも睡眠不足の方が害を爲したと言つて居る、今少しく詳しく言へば三日間空腹ならしめた時には唯だ疲勞するのみで、それも遂には恢

復したが、三日間少しも睡眠せしめなかつた時には、遂に斃れて終うたと云ふことである、猫に就ては我輩斯様な試驗をして見ないから、果して犬と同一であるか否かを斷言することは出來ないが、矢張り眠の淺い、且つ極めて斷續的なものである處から見て、必ず同じものであらうと思はれる、何に致せ猫には睡眠と言ふことが、殆んど食物と同樣に必要なもので、之れ無ければ到底生存することの出來ぬものらしい、我輩に於ても無論睡眠は絶對的に必要で、唯だ一夜眠らないでも氣持の惡いものであるが、猫にありては殆んど恢復すべからざる運命に陷るものと想像されるのである、而して此想像は決して架空のものではない、昔から猫は小供が嫌ひてあると云ひ、又小供のある家では猫が育たぬと云ふによりても、亦我輩の實驗によりても斯樣に思はれるのである、由來小供は頑是のないもので猫が生命の爲めに眠つて居る時にも、突

然之を懷き上げて目を覺させる、否眠つて居る時には懷き上げ易いからして、猶更頻繁に抱くのである、此時に於ける猫の不快は何程であらう、我輩が晝寢をして居る時にも不意に起さるれば、隨分腹も立ち且つ不快を感ずるものであるが、猫の如き絶對的に必要なる睡眠を妨害された時には、不快極點に達することゝ信ぜられる、猫は小供を嫌ふと云ふのは恐らく此故なので、斯の如き睡眠の妨害食物よりも大切な睡眠の妨害の爲めに猫は段々痩せて來るのである、小供の有る家では猫が育たぬと云ふのは全く此故であらう、成程見れば小供の澤山居る家の猫は大抵は痩せて居る、福々しい猫は小供の澤山居る家には甚だ少ないものである、猫は小供に愛せらるれば愛せらるゝ程愈々痩せて遂に骨と皮ばかりになるのである、然れども猫は小供を嫌ふものではない却て小供と遊ぶことを喜ぶものである、殊に發育盛りの小猫の如きは

小供と共に嬉戯するを好むものであつて見れば、決して猫は小供を嫌ふものとは言へないのである、然るに小供の多くある家では猫が育ないのは、小供等が小猫を愛するの餘り負ふたり抱いたりして、其必要なる睡眠を妨げるからのことである、見よ小供の居らぬ家に飼はるゝ猫は福々しく育つて居るではないか、又小供が居ても其小猫を餘りにいぢらぬ家の猫は丸々と育つて居るではないか、實に此猫の睡眠を妨害する處の小供は彼等の發育上大なる害敵と言はねばならぬ、左れば小供が幾人あらうとも若し絶對的に必要なる睡眠さへ妨げなければ、猫は小供と共に能く育つに違ひない、小供と猫の睡眠との關係は右の次第であるが、然らば睡眠さへ妨げなければ小供が多くあつても差支はないかと云ふに、之は無條件にて應ずることは出來ない、何となれば小供は猫を抱きたがるもので、此又抱くと云ふことが生理上最も宜しくない、猫は小供と共に嬉戯するを喜ぶけれども抱かれるのは實に嫌ひである、夫れも成人が抱くならば猫に苦痛を與へぬやうにするけれども、小供には其理解が無い縦令や有つても斯く爲すことが出來ないのである、而して其抱かるゝ處の中にも腹を持たれるのは一番悪いやうで、下痢も起せば從つて痩もする、即ち小供のある家では、猫は睡眠を妨害され且つ腹部を揉まるゝ爲めに生理上の障害を來し、遂に痩せ衰へるのである、昔から犬は小供を友とし猫は小供を敵とすと云ふのは此故であらう、左れば小供の澤山ある家にて猫を立派に育てやうとすることを禁じ且つ寢て居る猫を起すことをも止めなければならぬ。

第五節　猫の衛生

猫を惡く言ふ人々は猫は汚はしい動物であると云ふ、曾める、シャブる泥足で居間へ上る、斯樣に見て來れば餘り綺麗な家畜ではない、然れども是は躾なき猫のことで、凡の猫には當て嵌らない、而して先づ斯樣な缺點があるとしても、猫と云ふ動物は實に綺麗好きな者で、恐らく身嗜みの良い事に於ては人間以上である、猫の寢る處を見給へ、春秋の候は必ず日當りの良い處で、夏は臺所の水邊か但しは風通しの良い凉しい場所である、冬は炬燵又は人の膝の上の如きコンモリと暖かい處に寢るのである、座敷に座布團があれば必ず其上に座し、綺麗な布片又は紙類があれば又其上に乘るであらう、又其身嗜みに就ては成程泥足で疊の上へも昇りはすれど、自分の足には泥は愚か垢一ツ溜めて置くことも しない、必ず趾の間を曾めて曾めて綺麗にするのである、毛皮は丁寧に曾め盡して清潔にし、顏は又格別に注意して拭ふことは誰も知つて居

らう、若し夫れ排泄に至つては實に完全な衛生家で、或國民よりも遙に優つて居る、彼等は苟しくも糞尿の臭氣ある處では、決して再び排泄するものではない、少しも臭氣の無い處に往つて能く其土を堀り、排泄し終れば大便たると小便たるとを問はず、其上に土を掩ひ幾度か嗅いで少しも臭氣のせぬやうにして歸るのである、唯だ畜生の悲しさには雨上りの日抔には、其爲めに足の汚れるのを攝はないのであるが、是れは畜生として怨す可き理由が十分にある。

是れは治療本能ではあるけれども、猫は又簡易なる醫術を知つて居る、假令ば、或有毒物を食ふた場合には、必ず野に出て數種の草を噛み、其食ふたる毒物を吐出すものである、而して又時とすれば或物を吐出したる後ち素人たる我輩が其苦しみを慰めんとて、大切にしてやれば却て之を忌み、處もあろうに椽の下の土間に腹打着けて寢て居ることも

ある、是等は恐らく腹を冷やして、其毒物の消却するやうにとの自然の働きであらう、何にせよ是等の點より見れば假令治療本能とは言へ、衛生上に適つて居ることは否定すべからずである、又體の一部に腫物の出來たる場合にも、能く其近邊を嘗めて居るが、之れ又唾液に殺菌力を有するよりして斯樣に爲すのであらう、思ふに彼等は下等動物である から、彼等自身に於て醫藥の苦味を忍ばない、そこで嘗めて見る、快感を覺ゆる、益々嘗める、即ち嘗める に從つて、唾液中の殺菌力が働いて、其腫物を癒すに至らしむるものと信ずる、言はゞ最も幼稚なる醫術と稱すべきであらう、尤も此說に對しては絕對的に反對意見あり、猫には腫物や切傷等を嘗めさすれば却て膿を持たすと云ふ說もある、兎に角猫が或る病氣に罹つた時には治療本能の命ずる處に從ひ、野に出でゝ青草を噛み自ら其病を治療するのは、一種の醫術を解して居ると云ふも差

支ない、一體野生の畜類は鳥獸を問はず此本能を有するものであるから、青草多き田園に於ては態々青草を持歸りて與ふる必要はなけれども、都會に於ては大に其必要を感ずる、則ち猫が苦しみて居る時には直に數種の草を採集して之を猫の前に置くが良い、然すれば猫は自分の好む處のものを喰べるものであるから、之によりて其病を治することが出來る、但し草なれば良いと言ふので何でも種類搆はず持ち歸りても徒勞である、能く猫が野外に於て喰べて居る草類を持つて來て其中より擇ましむべきは言ふ迄もなからう、而して從來の經驗によると禾本科に屬する植物は大抵猫が食するものである、則ち此邊の見當をつけて數種の草を持ち歸り之を與ふるが良い、彼が治療本能は直に働いて自ら簡易な病を治するであらう、猫は一方に於て最良なる衛生家たり又簡易なる病をも治すとせば、彼等も醫術を知ると言ふも過言では

ないと信ずる、併し之れ嚴格なる意味のものに非ざることは辯解する迄もないことである。

第六節　猫の疾病と治療法

猫は衛生家である又治療本能によりて輕微な病傷を治するものである、然れども自然界には猫によりて自己の繁殖を計らんとする微細な生物が多くありて宿主たる猫を疾病に罹らしむる、又氣候の惡き爲めに生理上に障害を受けた爲に病者と爲ることも多い、又飼養者の誤りたる飼養法によりても疾病に陷らしむることもあれば、猫自身が傷を負ふて來ることもある、是等の事になると吾人人類も同じことで、病氣の種類の如きは猫と人間との間に大なる差はない、我輩は飼養の經驗によりて僅少の疾病を知るのみであるけれども、獸醫の說によれば却々病の數も多いのである、則ち外來の著述によりて猫の疾病を調べて見ると、感冒、結核病、胃病、肝臟病、腸蟲、下痢、貧血病、眼病、疥癬、濕疹、輪癬、耳だれ、等を重なるものとし、中毒其他尙澤山にあるらしい、而して是等の疾病の中には恐る可き傳染病もあり、又治療の困難なるものもある、且又如何なる種類の病氣たるとを問はず、服藥其他治療に就て容易ならざるもので最も能く熟練したる醫師と雖も困難を感ぜらるゝのである、我輩の猫故久子は惡性の濕疹に感染して來たので、入江濤吉氏の治療を受けたが同氏は先づ猫の名前を聞き優しく其名を呼びつゝ診察されたけれども、久子は却々以て溫順にして居なかつた、一皮膚病を診察せらるゝも容易でない、之が若し複雜なる大患で診察容易ならざるもの、又或る手術を要するもの、乃至服藥せしむべきものであるならば、如何に困難であらう乎、此事を考へると猫にはどうしても病に罹らしめ

ぬやうに、平生注意すべきを染み〳〵思ふのである、而して猫に疾ひなからしむるには人間のそれの如く、平和なる陽光、新鮮なる空氣、良好なる食物、清潔なる居室、此四個のものを揃へるより外はない、而も之れ言ふ可くして行はれない說のやうに聞えるが、田舍に於ては其儘にして第一第二第四の三條件は具はつて居るから、第三の食物に就て多少の注意を爲せば十分である、都會に於ては猫は餘りに束縛せず食物の性質を猫に適せしむれば宜しいが、唯だ高價な猫で猫房に居るものは空氣陽光等に就て十分注意せねばならぬ、之より少しく上記の疾病に就て注意すべき要點を陳べたいと思ふのであるが、猫が疾病に冒されたならば直に良醫の診察を受くべく、素人考へを以て藥物を用ひ却て其命を隕さしむるやうなことがあつてはならぬから、其治療法に就ては悉はしき記述を避けるてあらう、此事を研究するには專門學者又は專門の醫書に就く可く、大體を知るには倫敦板『猫』と云ふ書に據るが良い我輩は其概略を傳へるに過ぎぬのである。

第一感冒　猫が風を引いたならば人間が風を引いた時の如くに、猫を溫かき且つ平和な處に置いて、烈しい風や寒い空氣に當てゝはならぬ、而して食物は成る可く滋養分の多い肉類を與へるべきである、感冒が愈々強い時にはキナエンを極めて少量宛丸藥にして五時間毎に與ふべしと、感冒が治療しても其豫後に注意せねば、餘病を發することあり、左なくとも又重き感冒に逆戻りすることは、人間のそれと同一である。

第二肺結核　猫が肺結核に罹る時は、絕えず下痢して體は日一日と痩せ衰へ行き常に惰眠を貪ぼりて、少しも活氣が無くなる、又體溫の昇降あり、時々忌むべき咳嗽を爲すものである、斯の如き猫は先づ危險なものとして、良醫の診察を受くべきである、飼養主の注意としては、日光の透

入を豊かにし、室内を平和に取り、殊に寒い時分には其室を溫暖ならしむべく、食物は牛肉の如き滋養の多い物を澤山與へるが良い、藥劑は蒐麻子油烏頭丁幾等を一日に一滴宛用ふること、又水を飲みたがる時には之を與ふるが良い、兎に角此種の病は重病であるから、必ず良醫の手に托すべきもので素人が彼是して居るべきではないのである。

第三胃病　如何なる物を喰ても悉く吐出し、食物でも液體でも少しも受附ないで皆吐出し、遂に俗に言ふ處のカラエッキと云ふことをするやうになる、之は明かに胃病なのである、猫若し胃病に罹つたならば、少量の重炭酸曹達を牛酪に加へて食はしめ、又食物としては卵の白味を與へるが良い、胃が惡いとて牛乳を與ふることは大なる効力はない、而して此病患が重いものであるならば、矢張良醫に診察して貰ひ、注射其他適當なる處置を受けねばならぬ。

第四肝臟病　猫は肝臟を患ふと初は帶光黃色のものを吐出し遂に暗綠色の物を吐出して著るしく衰弱するものである飼猫若し斯る病の徴候を呈したならば、猶豫せず良醫の診斷を乞ひ、親切なる看護を盡すべきである。

第五腸虫及條虫　猫は屢々腸虫に冒さるゝものである、腸虫は小さき蚯蚓樣のもので、其寄生の原因は不良なる食物殊に腐敗に傾きたる魚肉にある、飼養者は直に適當なる手當を施すべきである、勿論藥物療法としてはサントニーヂ丸二三粒を與へ、暫時にして又蒐麻子油を少し宛與ふること二三日なれば治療が出來る、條虫なれば其害も其危險も一層烈しきものであるから、之は無論獸醫に托するの外はない。

第六下痢　猫が下痢するにも拘はらず其儘にして置く時は、往々にして赤痢病となることがある、故に下痢の徴候ある時は速かに少量の蒐

麻子油を與へるが良い、重患となれば獸醫に頼むべく、食物は滋養物を十分に與へて體の衰弱を防ぐべきである。

●●●第七貧血病●●●　生活狀態の可良ならざる場合、又は下痢や胃病等により體が衰弱したる時、或は寄生蟲が寄生して其養分を吸收するが如き時に於て、往々猫は貧血病を起すものである、之等は其原因を除き又は改良するに限る、重きは醫師の投藥と指揮に從ふべきは言ふ迄もない。

●●●第八眼病●●●　眼病も隨分多い、然れども之は醫師に待つより外はない、輕微なものは清水にて洗つてやれば治する、又ホーサン水で洗ふも良い、併し中には重病もあるは勿論又消化不良の爲に來ることもあれば、其狀況に鑑みて全身療法を採るべきである。

●●●第九疥癬●●●　猫が疥癬を感染して來ると其病患が進むに從つて毛が非常に拔け去り、且つ一種の惡臭を發するものである、而して此病氣は人にも傳染するものであるから、家族は厚く注意しなければならぬ、之を治療するには猫の毛を苅り取りて硼酸軟膏を塗布すべく、且つ滋養分多きものを食はせて衰弱を防ぎ、疾患に對する抵抗力を養ふやうにすべきである。

●●●第十濕疹●●●　猫に濕疹が傳染しても治療甚だ困難である、疥癬にせよ濕疹にせよ體の大半に蔓延すれば全癒することは到底短時日では行かない、殊に長毛族の猫になると全治の困難は想像以上である、治療法としては菜種油バラフヰン●●●及び硫黄華を能く混和して塗布するも良いが、彼の疥癬に用ひたるが如き硼酸軟膏を塗布すべきである、食物には或る可く新鮮な滋養分の多いものを與へるが良い、而して其疥癬たると濕疹たるとを問はず成る可く速かに醫者に見て貰ふべきで、放任し又は素人考へを以て治療抔して居るのは甚だ心得違ひである。

第●●●十一輪癬　輪癬も亦猫に取りて治療の困難なる疾病である、此病を治するには沃度の強きものを刷毛にて塗るので、一日に二三度塗る時は治療に効あるものである、之も亦良醫の手に掛るが宜しく、食物は濕疹や疥癬の場合と同じく滋養分の多いものを與へねばならぬ。

第●●●十二耳だれ●　耳だれを治するには硼砂粉を少し宛、一週間に二回程耳の内部に散布すれば治するものである、又之を治するに油藥もあるけれども之を塗る時は耳を不潔にし、從つて猫に不快を與ふるものであるから、油藥は用ひぬが良い。

以上述べたる處の外に猫の疾病は澤山ある又治療の困難なものが多くある、併し其普通なものでも良醫に掛けねばならぬことであるから、特別なものに至つては尚更であることは言ふを待たない、從つて之を記述するも一般には大なる利益のあるものではないと信ずる、唯だ呉々も希望したいのは猫が病に罹るやうな取扱ひをせぬことで、一旦病に罹つたならば相當の手當を施して置き、其重病とならぬ中に醫師に連れ行くべきである、殊に其病が傳染性のものであり、多數の猫を有して居る時には愈々其必要を感ずる次第である、人間に於て從來の經驗上風邪であることが判つて居ても尚素人療治は危險であるのに知りもせぬ猫の病氣を良い加減に取扱ふのは實に無法である、病と見たら醫師に往け、山間僻遠の地にして獸醫が無いならば、其容躰を書いて、又皮膚病ならば剝落せる毛抔を容躰書と共に郵便にて送り、其指圖を受くるが良からう。

居室としては清潔なる空氣、平和なる陽溫の來る處食物としては新鮮なる肉類及び野菜、此二要件を具へて置けば先づ病氣に罹ることはないと言ふべきであるから、猫飼養者は先づ之に向つて意を注ぐべきで

ある。

第七節　猫の娠姙と小猫

猫は満一ケ年にして成熟し孳尾し出産する、而して其出産數は若い盛りには四五頭に及ぶものであるが、時に流産もし或は出産兒に故障も生ずることであるから、満足に育つものは甚だ尠ない、又猫が生む丈の子供が悉く育つた日には吾々に影響もする、從つて猫自身の幸福に關係するに違ひない、併し子を産むことは隨分達者なものであるから、我輩敢て好奇心とには あらねども、一對の夫婦猫が五ケ年間に繁殖する數を計算して見やう、尤も此計算は一ケ年出産二回産兒三頭、内雄一頭雌二頭と假定したものである。

茲に昨年春生れの猫が雌雄一對ある、而して今年の春子猫を三匹産み

内雌が二匹で雄が一匹である、則ち此春には親子五匹で内雄が二匹雌が三匹となる、秋には其親猫が又雄猫一匹と雌猫二匹とを産むからして都合其年には八匹の猫となるのである、然るに翌年の春に至れば今年の春生れの雌猫は二匹共に三匹宛の子猫を産み親猫も亦娘猫に劣らず同樣に産むのであるから、數年の後には隨分澤山になる、左表を見るが良い。

年次	雌	雄	計
昨年冬	一	一	親猫一對
初年春	三	二	五
初年秋	五	三	八
二年目春	一一	六	一七
二年目秋	二一	一一	三二

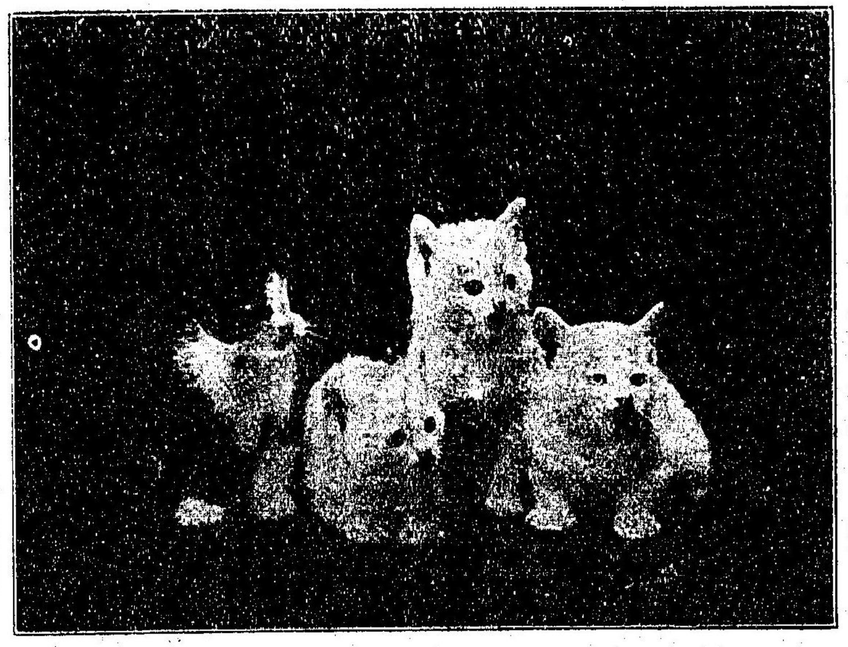
三年目春	四三	二二
三年目秋	八五	六五
四年目春	一七一	八六
四年目秋	三四一	五二二
五年目春	六八三	一〇二六
五年目秋	一三六五	二〇四八
合計	一三六五	二〇四八

一年生む處二回其數を三頭として計算しても僅々五ケ年の後には二千四拾六頭の子福長者となるのである、即ち表示する如くに親一對共合して二千〇四十八頭となるのである、唯一對にして尙且然りとせば全國に居る處の何百萬の猫が皆斯樣に生むだならば、我國は猫の世界となり、我輩は却て猫の爲に驅逐せらるゝ譯であるが、今日に至る迄其憂ひなかりし如くに今日以後も其心配は無い、之れぞ即ち自然界の妙所である。

扨て之より猫の娠姙と小猫に關することを述べるのであるが、猫は前にも言ひし如くに滿一ケ年にして成熟し孳尾し姙娠する、而して其胎兒が母の腹中に居る間は九週間即ち六十三日で、勿論時として六十二日にして生むこともあり、又六十三四日目に產むこともあれど、是等は何れにしても大なる影響はないのである、併しながら夫よりも二三日も過きて尙生ざる時には注意しなければならず、又模樣によりては獸醫に見せてやるべきである、彼一時喧びすしかりし本所區で踊つたと云ふ猫の如きも、無論香具師輩の作事には相違なけれど、併し斯る事は難產の結果ヒステリー症を起した猫に往々あることである、左れば難產の氣味あらば勿論一定の時に至りて尙產氣着かざる場合には良

醫の診察を乞ふべきである、而して又猫が産氣を催ほうす時は其出産所を求むるにて何となく落着ぬ風をする若し其と知れたならば適當な場所を撰定してやるべきである、古く我輩の處に居た猫は子を産まんとして我輩が寢て居る夜具の中に入り、其處にて出産したこともある、又子供が澤山居りて常に騒物にする恐れある家では其家を去りて他に轉ずるものである、何れにしても其子を産むには非常に心配するものであるから、成るべく空氣の停滯せざる、成るべく太陽瀉の透すやうな處に、小箱でも籠でも與へて置いて、其處て安々と生ましむるが良い、且又其産所は度々見に行くべきである、食物に於ける親への注意時は、其子を喰へて逃去るものである、食物を與へて、有効なる乳汁の多く出るとしては成るべく滋養分のある物を與へて、有効なる乳汁の多く出る樣にすべきである、營養不足の爲に親猫を弱からしむる時は、從つて其

子猫も立派な發育を遂げることは出來ない、小猫に對する注意は次章第六節に於て述ぶるが如く親猫自身にも十分其心得があるけれども、之亦多少氣を着けてやるが良い、則ち産所の空氣が不潔であり又は太陽の光線に遠かりて晝ても薄闇いやうな處では子猫の發育不良なるのみならず、眼病又は皮膚病に罹り易いから、先づ第一に此點に注意しなければならぬ、子猫に歯が生いて來る頃になると親猫は食物を嚙み碎いて與へるものであるが、此時期になつたならば肉類を細かにして與ふべく、又其居場所たる箱や籠の類は親猫の居らぬ時に能く見廻はりて、少しも不潔なものゝないやうに掃除してやるが良い、斯の如く食物衛生其他に注意を加ふる時は子猫の發育は日に增すもので、則ち出産より約五十日の後には親猫自ら子猫を連れて家族の處に持て來て、嚴重なる看護の下に家族の鞠養を受けんとするものであるが、尙玆に



小猫の寫眞

子猫に對して多少注意して置くべきことは、人の顏を一度も見たことの無い子猫は、家族の處に連れて來た時に非常に怖がるものであるから、食物を取るやうになつたならば、細に碎いた肉類を持つて行つて、親には安心を與へ又寫子猫には人は決して恐るべきものでないことを知らして置くべきである、然り然して子猫が家族の中に置かるゝ頃は最早戲期に進むて居るものであるから、其愛

らしいことは非常なものである、妙な顏をしたり、妙な手附をしたり、上になり下になりして戲れ廻はる處の愛らしさ實に言語に絕する、猫の子の戲れ廻はる處は誠に一の樂園である。

第三章　猫の智情意

第一節　猫と色の嗜好

聞く所によれば野蠻人は赤色を愛すると云ふが、我輩文明人にしても尚野蠻の域に居る所の子供は赤色を好み、段々と大きくなるに從つて、色の淺いものを好むやうになる、而して純白色のものを以て最も高尚なものとするのは、我輩文明人の常である、左れば染色上の嗜好より人の文野を別てば、白色若しくは水色等を愛する者は最も文化したるもので、青色だの紅色だの又は紫朱を愛するものは之に中し、緋や赤を好む者は子供か又は劣等なる地位に居るものと言ふて良い、扨て是から猫は如何なる染色を好むかに就て述べるのであるが、矢張り野蠻人にも及ばぬ猫のことなれば、其好む所の色は燃ゆるが如き赤色であるら

しい、併し是れは確乎としたことは言へないが、數回の調査は殆んど一致して居るから、先づ斯樣に假定するのである、我輩は平太郎と彦次郎と久子の三匹を置いて、赤い紐と、白い紐と、青の紐と此三種の異なりた る紐を出し、少しく引摺つて見た、然るに其結果は何れも赤紐に來たのである、更に此通りにして第二回の調査を爲したるに、又同じく何れも赤い紐に飛び着いた、第三回の調査にも矢張り赤い紐に飛び着き、如何にも嬉しさうにして居た、今度は我輩の家人をして斯く爲すこと三回ならしめたるに、矢張り同じく赤い紐に飛着き、次は青い方に向ひ、白い方には來なかつたと言ふて居る、此紐に於ての調査は兎に角猫は赤色を最も好むと言ふことを得せしむるのであるが、今度は品を代へて赤と、青と、白とのリボンを首に卷き着けて見た處が、何れの猫も赤いリボンの首環を喜ふものゝ如く、白いリボンを着けた時よりも、餘程嬉しげ

に飛び廻つて居たのである、是も我輩の見る處と家人の見る處と一致した、今度は更に赤と白と青との涎掛を作りて、矢張り首に纏ひたるに、是れ亦前と同じく赤いのを喜んだ、我輩の家人も同樣に觀察して、其見る所同一であつたから、茲に猫は赤色を好むと言ふて可からう、左りながら猫によりては少しも感ぜぬのがある、又年齡によりて相違がある、而して其赤色に飛着くのは幼少な猫程早く稍や老ひたるは甚だ遲かつた、又或猫は赤にも白にも青にも何の感興を起さなかつたやうに見えたから、凡ての猫は必ず赤色を愛するものであるとは言へまいが、實驗は甚だ少數なれども、我輩が調査したる範圍に於ては、猫は赤色を愛するものと言ふても差支はないのである。

猫殊に小猫は赤色を愛すれば、首環や涎掛の類は赤いのが第一である、又小猫が赤い首環を嵌め、又は赤い涎掛をして居るのは別けて可

愛らしいものであり、殊に白いのや水色の如きは汚れ易いものである から、猫の欲する上からも、又飼育して愛翫する上からも、小猫には赤色の紐又は涎掛を用ひるが好い子供の四五度も生むだ所の爺猫や婆猫には首環でもあるまいし、又涎掛でもあるまいが、丁度斯樣なものを與へて愛を增す所の小猫には、他の色よりも赤が好い、猫も喜び吾々が見ても可愛らしい猫を實用的に飼育する人は兎も角、之を愛して飼育する人の心得べき點と信ずる、又實用的に飼育する人でも美はしい毛色に、赤い紐を首に廻したのは見苦しくもあるまいと思ふから、詰らぬ樣なことなれども我輩の調査した所によりて猫が赤色を好むと云ふことを述べて置く、併し今も言ふ通り或は偶然の結果かも知れぬのであるから、間違つても責は負はないのである、色の嗜好よりする首環や涎掛のことは前述の如しとして、茲に是非共白又は水色の如き派手なる

首環又は涎掛を結び且つ鈴を着けて置くべき猫がある、之は眞黒の熊猫で、此黒い猫は往々にして暗い處に居る時に尾を踏まれたりするものである、そこで其首に派手な首環を結び且つ鈴を着け置くなれば、何れに居るかを知ることが出來るから、不測の危害を與ふるやうなことはないものである、尤も猫の目は能く暗夜に光るものであるから、起きて居る時には其必要も無いやうであるけれども、寢入て居る時には甚だ險難である、思ふに猫の尾や足を踏みて彼をして悲しき聲を發せしめたことは何人も實驗したことであらう、左れば黒い猫には色の嗜好如何に關せず其身の保護の爲めに白色又は水色等の首環と鈴とを着けて置くが良い、併し此鈴と捕鼠とは兩立しないもので、如何に其猫が鼠を捕りたくても歩く毎に鈴が鳴つては堪らない、之は鼠に自分の居場所を通知しつゝ追ひに行くのと同一である、如何に

鈍間な鼠でも鈴を着けた猫に捕られるやうなことはあるまい、故に鼠を捕らしむる猫には白色又は水色の首環丈にして鈴は見合すべきであるが、小猫には此兩者一を缺かぬやうにすべきであらう。

第二節　猫の表情

凡そ高等動物には喜怒哀樂の情ありて、悲哀、忿怒、欣喜歡樂の情をば何等かの形式によりて發するものである、吾々人間ならば悲哀には泣き忿怒には激し欣喜には笑ひ歡樂には一種微妙の動作を爲すものであるが、猫とても高等なる動物である以上は、此喜怒哀樂の情を發するは無論である、殊に人間に於ては喜怒哀樂共に場合によりては面に出さぬこともあるけれども、猫の如きは喜怒哀樂共に赤裸々であつて少しも自制することは無いから、悲哀忿怒欣喜歡樂皆現はれぬと云ふこと

はない、併しながら其表情は極めて單純なもので、時に或場合に於ける表情の如きは不明瞭なることもある、且又此表情に就ては前述の如く に人間は泣くとか笑ふとかするのであるけれども、猫には泣くと云ふことはなし又笑ふと云ふこともないのであるから、其表情は必ず一種の動作と又啼聲を以てしなければならぬ、從つて之を記述することは甚だ困難を感ずる次第である。

猫が快樂の情を發表するには二種の形式を以てする、即ち一は彼等が鼠を捕つて來た時に發するものであるが、此時には半死半生の鼠を投たり喰へたり又鼠を蹣跚歩かせたりして、暫くは嬉しさに堪へざるが如き風を爲して居る、此有樣を見て人は猫を殘酷なる動物であると云ふのであるが、之に就ては我輩も辯疏の言が無い、併し鯉の生作りを以て趣味ある料理と心得て居る動物はないか、若しあらば其殘酷性は猫

以上である、而して猫が快樂の情を發する他の一は多く人の膝に居る時に發するので、即ちゴロ〳〵咽を鳴らして居る、之は常に愛してやる人が膝の上に置くとか又手を猫の上に置いて見れば直に判ることである。

猫が恐怖する時は先ず其尾を垂れ耳を寢せるものである、而して多少足を屈めて筆にも言にもし難い動作を爲すものである。

猫怒れば如何にも恐ろしい形相を爲し其牙齒を露はして一種の唸りを發する、此時こそは遺憾なく猛獸性を出すものである、又彼等が厭がることを爲す時にも一種の惡聲を發するものであるが、之は例令ば尾の着元を稍強く撫て見れば眞ちに實驗することが出來るであらう。

猫と猫とが初めて會見するか但しは暫く會はずして再會するが如き時には必ず其顏と顏とを附合はし、暫くは無聲を以て嗅ぎ合つて居る、

而して或者は唸りて追ひ或者は之を迎へるのであるが、恐らく此嗅合ひと見ゆる間に再會者たることを理解するか又再會者ならざるも交際すべきことを信ずるか乃至到底自分の友に非ざることを知り得るのであらう、而して斯る場合の排斥は彼の忿怒と殆んど同一の形相を爲すものである。

悲哀は親子の間に最も良く現はるゝものであるが、親が子を失ひたる場合には泣き廻はりて家に落着かぬ、又小さい時に親から離せば之亦泣いて泣いて始末に困る程である、而して其子猫が泣くのは別に特色はないが、親の啼聲は子猫を呼ぶ時に用ふるものと同一なので、一層同情を起さしむるものである。

寂寥を感ずることは子猫のみではない、成人したる猫に於ても其友猫が居なくなれば、之れ又一種の啼聲を以て呼び廻はり、相會すれば如何

にも安堵したらしく、直に傍に往つて其毛を嘗めたりシャブッたりする、猫に留守番をさせて家人が外出する場合にも矢張寂寥の號泣を爲して居る。

猫が何か欲しい時には極めて柔和なる聲を以て啼きつゝ附纏ふものである、而して與へたる物が彼等の欲しがるものであるならば此時にも一種の嗄聲を發するものである、又其與へたるものが猫の嫌ふものであると言ふことが出來やう。

少なくとも欲しがらないものならば、如何に鼻の前に持つて行くとも知らぬ顏である、現金な動物である。

猫は產をする時には人の處に來て頭を擦つたり、附纏ふたりする、之は苦痛を訴へるのであらう、而して撫てやれば如何にも嬉しさうにすることは隱れもないことである。

要するに猫の表情は喜怒哀樂凡に及べども、涙と笑ひとを有せざるが

故に何れも深刻でない、從つて尙更考へてやらなければならぬ理由となると思ふ。

第三節　猫の智慧と理性

猫の智慧は極めて淺劣で理性は最も微かなものである、併しながら注意して之を觀察すれば慥に認識さるゝので、猫とても決して馬鹿なものではない、卽ち二三の實驗的材料によりて、智慧と理性とが那邊に迄で發達せるものであるかを述べるであらう。

猫には數と大小に關する觀念は甚だ乏しい、彼等に取りて食事上最も不安なる狀態、卽ち二頭以上の群集に於て、大小二個の肉片を與へるならば、若し人間ならば先づ大なる物を前に取り小なるを後にするのであるが彼等は他の者に奪はれるのを憂ひながらも、最小なるものを口

にして、大なるを敵の前に置いて居る、彼等眞に大小を鑑別するならば、先づ大なるを取り、小なるを後にして、食事の不安を免かるゝであらう、數の多小は多くの場合に於て量の大小に均しいことであるが、同一量に切りたる肉片を散布して、量を增さぬやうに見せ、矢張二頭以上の猫をして、其多少何れかを擇ましめた處が、是亦大小に對すると同じく辨別することはなく、懸離れて散在せる一片に向つて突進した、是等の事實によりて猫は人小も多少も識らぬ動物であることを斷言出來る、然れども習慣は敎育である、彼等は魚屋と肉屋とを能く記臆して居る、魚や肉を持つて居れば無論是等の物を持たぬ時にも、其聲を聞いて飛ぶが如くに走り行く、斯く言はゞ大工に杉や檜の香ひがする如くに、魚屋には魚の香ひ、肉屋には肉の香ひがするからだと、言はるゝかも知れぬが、實驗する所によれば、障子や襖子を隔てゝ居ても、其聲を聞くと共に

走り行くことてあるから、其香ひは無くとも識別することが出來ると見える、座敷に寢て居る時に、勝手の間に於て牛乳の壜のバ●を外づせば、直に飛んで來る、是等は自己の嗜好物に對する本能上の働きよりして、數回の繰返しが自然に知識となりて現はれたるものであらう、而して又嗜好物に對する要求よりして、之を盜取せんとするときには、色々の手段を以てして居る、假令之を取り得ぬ迄も低度の智識が働いて居ると言はねばならぬ、食物上の事は以上の如しとして、野の雀と家の雞とを見別ることを言はゞ、野の雀と雞とは形の上に大なる差異はない、蛙でも蛤蜻でも捕へて食ふ猫輩には、雀も雞も雞も別ちのあるべきものではなからう、否寧ろ捕るよと云ふことになれば、雀よりも捕り易い點に於て、雞を見るならば垂涎三尺に違ひない、然るに嚇威的に教訓して置けば假令雀を捕る所の妙手でも、雞は斷じて捕らぬものである、

飢餓に迫らしむれば無論雞をも捕るであらうが之は例外である、人間でも貧の盜みと云ふことがあるてはないか、偶には渴しても盜泉を飮まぬ人もあれど、猫には斯樣な義人は無いのである、野の雀は捕つても良し、野に遊べる鷄の雞は捕つてはならぬと思ふ處、是亦智識の支配で無ければならぬ、斯樣な例は澤山あるが一々擧ぐるは管々しい、無論習慣的な單純なものであるが、食物の番をする猫も所々にある、淺草公園の觀音裏に一軒の煎餅屋がある、此商賣の習ひとて拵えたる煎餅は悉く之を干すのであるが、屋根の上に持ち行けば猫も必ず一緒に登り、其煎餅のある間は傍に蹲まつて居て烏を追ふのである、烏は煎餅を取らうとする、猫は取らすまいとする、そこて一場の爭ひが起る、吾輩は現に之を實見したことがある、併しながら此猫が烏の番をするのは、氣に向いた時のみて、厭な時には決して番はしない、又烏が自由に取つて逃げ

ても知らぬ顔である、是は畜生だから仕方がない、人間にも留守番が寢入りて自由に盜賊を入れた話は屢々聞くことである。

●ンと云ふ猫が自分の飼はれて居る家のカナリヤの危險を救ふた話は、小學校の讀本にも出て居た、今其梗概を擧げて見ると斯うである、或日一匹の泥棒猫が入りて金絲雀を捕らうとした金絲雀の命は瞬間にして泥棒猫の毒手に奪はれやうとしたので、其驚愕悲嘆は一方では無かつた、●ンは此現狀を見て直に其猫と爭ひ、且つ隙を見て其金絲雀を喰へて別室に入り、傷も附けずに金絲雀の危難を助けたと云ふのである、之等は實に猫に於ける稀有の美談で、人間でも斯樣な事蹟は必ず表彰せらるべき大なる美擧である、況や下等動物而も好物の大小さへも知らぬ猫の仕業なるに於てをやである、理性の發達と云はうか、實に見上た振舞と云はねばならぬ、又故老の話によると、我國にも之と類を同じふする話がある、（第五章第三節以下）寢て居る赤子を喰はんとて來れる泥棒猫を追ふて、赤子の生命を助けたと云ふのである、此種の事も必ず有つたことゝ信ぜられる要するに猫の智識理性は極めて淺劣低度のものであるけれども、教育と訓練とによりては或種の事象に對してのみ、高尚なる働きを爲すものである、左れど之が常識となるや否やは疑問であらう。

第四節　猫の友義

友義も亦猫に於て積極的發達を見ない、前記●ンの如きは實に稀有のもので、千萬頭の猫中に一頭か二頭のものであらう、淺草聖天の近傍の某活版屋の猫は、其友人たる犬の爲めに戸障子を開けてやるが、是等も亦友義上の一發動と見てよからう、併しながら是等のことあるが故に

猫は友義に富むとは言へぬ、我輩の久子と云ふ猫が一夜危險に瀕した時に平太郎は何となく心配さうな顏をしたことがあるけれども、是れとても其危險に對しての同情であるか否か甚だ疑がはしい、縱令同情であつたにしても、何等慰藉を與ふるではなし、又何等其苦痛を免れしむる手段を採るではなし、其積極的なる友義心の發動として、見る可きものは無かつた、左れば我輩の知り居る範圍に於ては一二稀有の例を除けば、友義の極めて薄弱なるものと言はねばならぬ、然れども其消極的なる友義は平常認められぬでもない、彼等の互に掌合ひを爲すが如きは其一である又二頭以上の猫が居る場合に其一匹が居なくなれば寂寥の感を起して呼び廻るのも、友義心の發動と見て良からう、併し掌合ひを爲すのは凡ての猫に於て見ることであるが、其一友人が居なくなつた場合に騷ぎ廻るのは甚だ少ないやうに思はれる、我輩の猫に於

て實驗した所によれば、久子が死んだ時に憂顏をしたのは矢張平太郎であつて、其他の猫は何等の感じも起らなかつた樣に見へた、之を以て見る時は特別に友義心の深いのと淺いのとあるらしい、前のは一方は女性で他方は男性であつたから、其間に奇しき關係を有して居たかの疑ひも起らぬではないが、更に其後平太郎が危險な場合に陷つた時も、花子や藤子は之に對して平氣なものであつた、之を以て見れば友情の淺深存否は矢張猫によりて異るもので、雌雄關係に原因するものではないと言ひ得るであらう。

猫の平常生活は實に愛らしいもので、數匹のものが能く親しんで居るから、誰が見ても仲の能い兄弟又は義兄弟と見へる、左りながら斯樣に親密な猫でも食事の前には仇敵である、通常の食物例へば飯の上に鰹節を削づつたのを振掛けた位のものならば、互に其處を得て食ふこと

てあるが一片の肉てもあらうものなら、彼等は親も無ければ兄弟もな
い、況や友人に於てをやである、彼等は其肉を爭ひ、相排するに力めるので、其有様は餓虎の肉を貪ると云ふ形容詞も、斯くやあらんと思はしむる位である、實にや西洋の俚諺にも猫は肉の前に友人なしとあるが、能く其眞相を穿つて居る、其口にしたる肉片を奪はれまいとして爪牙を出し、又其他の猫が喰べて居るのを奪はうとして攻めて行く有様など、實に其見幕は恐ろしい位である、其時には遺憾なく猛獣の質が現はれるので、多くの人々は猫を以て外柔内猛の獣畜と爲すのである、そは兎に角として食物の前に友人なしと云ふのは事實で、我輩の見る所を以てしても此場合には友義も絲瓜もあつたものではないのである、左りながら斯の如くに相爭ひ相敵したる猫共も、其繋爭品たる肉片が無くなれば、多量に食つたものも、少しより食べなかつたものも、言ひ換ふれ

ば敗者も勝者も直に忘れたるが如くに、否忘れて終うて舊怨を殘すことは、少しもない、彼等は元の如き兄弟である、又元の如き友人である、互に罪合ひを爲すのである、人間ならば仲直りをしても多少の恨みを殘さうが、猫に於ては微塵も其跡を止めないのである、要するに猫の友情と云ふものは極めて消極的なもので、積極的に行動することはない、千に一つ萬に一つの佳話もあるけれども是等は全く例外で之れあるが故に、猫は友義に厚い動物とは言へぬのである、併しながら猫には又人間のやうに積極的な仇敵と云ふものはない、食物を奪られた猫より見れば其奪ひ取つた猫は不具戴天の敵である、然るに其奪れまいとする甘味も他人の手に渡りて形が見える間こそ、怒りの情も發するなれ、愈々其肉が他人の腹の中に入つて終へば、前述の如く互に甞たりシャップッたりして、其仲の良いことは言外である、序であるから仲間以外の猫が

食を求めに來た時のことを一言して置きたいが、即ち外來の猫が食を貰ひに來る時は家の猫が滿腹して食器を離れる迄は靜かに待つて居つて、愈々食器を離れてから食ひに行く、之は無論恐怖に原因するのに違ひなけれども亦食物道德が微かに現はれて居るのである、而して斯る場合には家の猫は默して見て居るのである、之れ一に猫は如何に美味でも滿腹して終へば其餘のものは顧みない性質なるに由るのである、らうが又食物に就て坦懷な動物であると云ふべきであらう、然り而して家の猫の許しを得ないで所謂猫の居ぬ間に食を盜むものは隨分可笑な態度を爲し居るもので、新參者の泥棒は斯くやと思はしむる、併し之も多少道德心が働くからのことゝ解すれば、泥棒猫も亦一種の可愛さを增さしむるものである。

第五節　猫の夫婦親子

猫に夫婦と云ふものはない、誰でも知つて居る如くに、孳尾期のみ夫婦關係を結ぶので平常は雌猫も無ければ雄猫も無いのである、左れば或る雄猫が或る雌猫と夫婦關係を結び、之に姙娠せしめ、正しく自己の子供を產ましめたる場合に於ても、孳尾期を越ゆれば全く無關係である、又雌に於ても子を產むで親となれば、全く夫婦關係より獨立して、其雄猫を見ること路傍の人も啻ならぬ、相愛し相慕ふのは雌雄共に孳尾期に限られて居る、夫婦關係に於ては猫は燕や雞にも劣つて居る、燕や雞は孳尾期を過ぎて產卵保護期に入れば勿論のこと、尙ほ其雛を育つる時に於ても、雄は常に雌を保護し、且つ食餌を與へる役を務め、愈々卵孵化して雛となれば、雌雄共に稼いで其雛を育つるのであるが、猫は雌に

姙娠せしむれば足るので、雄猫は雌猫を養ひもせず、又子を育つるに就ても雄猫は少しも關係せぬのみか、程經て食事時に一緒になり、前述の如くに魚肉でもあれば、昨日迄で相愛したる夫婦は、互に其肉を爭ふてあらう、猫の夫婦關係は最も劣等にして又最も不埒極まつたものである、併しながら雄猫も自分の子種の宿りて居る雌猫は記憶して居ると見え、自分を嫌ふた處の雌猫の生むだ子猫は迫害するにも拘はらず自分の子供に對しては愛護せぬ迄も危害を加へない、然り而して彼等が夫婦となるには決して亂暴なものではない、絶對的に自由なる撰擇權を極度まで利用して、雄猫は其配偶たる雌猫を擇び、雌猫は又其配偶たる雄猫を擇ぶのである、彼等は何を標準として擇ぶのであるか明かでないけれども、或は俗に唱ふる處の毛色によりて好き嫌ひを別つのであらうか、之は兎に角として自分の嫌ふ處の猫ならば如何に戀ひ慕はるとも、決して夫婦關係を結ぶものではない、之に就て面白い話がある、我輩の一知人は雌雄二頭の猫を飼ふて居たが、其牝雌期に至りて雌猫は平生の友人たる雄猫を嫌ふて他の雄猫の許に走つたので頓狂なる一知人は雌猫を呼ぶに不貞腐れを以てし、憐れにも其雌猫を殺して終うたのである、一知人の行ひの善惡は玆に論ずるの必要はないが、之によりて平生如何に仲が良くても牝尾期に至れば全く無關係であることを證し得る、若し彼等にして互に夫婦たるならば、そは平生親密なる關係あるが故ならずして、全く其毛色又は氣立に對して夫婦たる可き情が起つたからである、我輩は一知人の猫に於て友情と夫婦とは全く關係なきものなることを知つた、然り所謂毛嫌ひは少しの義理も人情もなく最も自由に行なはれて居るのは明かなる事實である。

左りながら其親としての雌猫は實に感心なもので、吾々人間よりも能

く務めるものである、二頭三頭多ければ四五頭の子供に哺乳し、稍や長ずれば飯や魚肉を噛み砕いては與へ、鼠を捕りて其甘味を覺えしむる抔は、別に感ずべきでないとした處が漸く歯が生へた位の猫には其小鼠を捕つて與へて其鼠の味を覺えさせ、而して其長ずるに至つては、鼠を捕つて來て自分で食ひ決して子猫には與へずに見せて居る、之は言ふ迄もなく捕へて食へとの示してある、之等は實に感ずべき親心と言はずばなるまい而して小猫等が大小便は皆自分の口に受けて、之を他に棄て、其寢所に汚物は愚か汚臭も留めぬに至つては、愛兒の襁褓を洗ふにも人手を煩はすが如き妻君達の恥づべきことであらう、家富み位高うして女婢の多勢なる家では、それも良いとして、育兒一切自分の手に引受けなければならぬ者の妻にして、其最愛の子供を糞便の附着した儘搆はぬ者もあるが、是等は雌猫に對して愧死すべき者であると思ふ、

而して此雌猫が此の如くに子供を清潔にして置くのは、固より自分が清潔を好むにもより、又本能に出づる者であるけれども、其れが爲めに子を思ふ精神の滅滅は意味して居ない本能でも何でも良い、雌猫が親としての振舞は實に見上げたものである、且又自分の子を失ふた時には非常に悲むもので、他の猫の子を盜むで來て之を育てゝ居ることを茨城に於て實見した、西洋出版の猫に關する一著書には子を失ふた雌猫が子供欲しさの餘り、兎の子を育てたことがあると云ひ、又狐鼠の子を哺乳したこともあつたと書いてある、又鼠の子を自分の子として愛育したのを見たと言ふて居る、或期間の外は妻は夫を知らず、夫は又妻を知らざる猫も親としては誠に立派なものである。

愈々小猫が戲期に入れば、家族の處に持つて來る、是れより小猫は人間と云ふ不思議な者の前に置かれ、其愛玩によりて馴れると同時に、彼等

は社會的生活を爲すのであるが、子を愛する雌猫は少しも油斷はしない、若し誰か子を虐待する者あらば、直に何れにか持つて行くものである、如何に子を愛するの深きかも是れにて充分理解せらるゝと思ふ、而して小猫が愈々成長するに至ると如何に親を慕つても近づくことを許さない、小供は乳を飲まうとしても、親は忿りて近づけないのは、人間で言へば獨立せよとのことであらう、又實際に於て之を見るに、親と子と長く一緒に置く時は或時期迄は、小供が著るしく痩せるものである、是れ子は乳を得んと欲して得ず、而も乳あるを知るが故に食を他に求めんとはせざるが故に、食餌充分ならざるに由るので、乳離れするや否や、他家に興へるのは可愛相に見えるけれども、長く親と一緒に居る兄弟よりも、丸々と育ちて愛らしいものである、此親猫が忿りて近づけぬやうになる迄で、一緒に置くのは小猫の爲めに不幸と云はねばならぬ、

少なくとも大幸福ではない、聞く獅子は子を產みて三日目、之を千仞の谷底に墜して、其子の强弱を試みると、獸王獅子としては適當の處置であらう、猫には斯樣な勇氣はない、併し稚兒哺育期を過れば如何に小猫が乳を欲がつても母親を慕ふても子を見ること敵を見るが如きは、天晴なる振舞と言ふべきである、猫兒愈々成長して他人の家に往けば現在の親子も何の關係はない、嘗て彼の親夫婦が孳尾期以外に何の關係を有せざりし如くに、彼等親子も又全く他人となるのである、我輩嘗て彦次郎を連れて親子の對面に行つたが、親は其子を記憶せず、子は其親たることを知らない、思ふに彼等の本能は親子倫を亂さしむるやうなこともあるであらう、而して彼等親子も亦之を知らざれば悋む所はないのである、左れば食物の前に親子關係が永續する筈なく、何も彼も全く赤の他人となるのである、然り猫の親子關係は子が他人に貰はれて

行くと同時に斷絶する、而して子猫は多少親を慕ふけれど、親の方では乳離れする頃の子供ならば、之を持去られても大なる悲みを感ぜぬのである、否側へも近づけぬ位であるから却つて其居らぬを喜ぶものである、斯くて親猫は又間もなく孳尾期を迎へて又々姙娠するであらう、而して其時の夫猫は或は昨年自分が生み育てたる子供であるかも知れぬ、思へば畜生と云ふものは可笑なものである、併なしながら猫に就て最も深き趣味を有し且飼養の實驗を有せらるゝ處の戸川秋骨氏の談に據れば猫が親子同棲して居る場合には親たる雌猫は子たる雄猫の孳尾的振舞を非常に忿るものであるけれども紫が薄いから最も美はしいないものであると言ふて居られる、之は至極尤もな說であると思ふ。

我輩の友人の處に駒と云ふ雌猫が居る、此駒と云ふ雌猫は當年取りて七歳の猫で毛色は灰紫色である、

猫であるとは言へぬ、即ち波斯の煙色短毛族に似て其猫の如くに美はしくない猫である、鼠を捕ることは名人で、多い時には日に四五頭も捕り、持歸りて食ひ飽きたる分は積むで置くのである、又子供を生むことも人後ならぬ猫後に落ない方で、七歳の中婆樣人間で言へば既に六十の坂を越して居ながら、必ず四五頭の小供を生むのである、而も年に二回は出産するのであるから先づ壯健なものである、扨此駒は面白いことをやる猫で暫らく鼠を捕つて來ない時に、家人が近頃少しも鼠を捕らぬぢやないかと言へば、其日から盛に鼠を取出すのである、併し之は偶然のことかも知れぬとして、此本題に最も關係のある子供に就ても却々尤もらしいことを斷行するのである、則ち家人が縹緻の悪い子を生だと云へば其子を喰ひ殺し、何だか家人の言語を解するやうにも見へるが、又自分で其子を喰ひ殺すこともある、而して其喰ひ殺す處の子

猫は必ず發育の不十分な末の見込の無いものであるよりすれば、恐らく醫術を知らざる彼は不具癈疾として此世に活かし置くよりは寧ろ殺すに加かずとして之を喰ひ殺すのであらう、且又子供を澤山産むて、其乳の足らざる時には之を喰ひ殺すのである、而して駒ちやんは家人の言語を解して多く行ふやうである、けれども、之は疑問とした處が其虚弱なる子供を殺すに至ては親としての至情が現はれて居るてはないか、而して是等のことは雪に駒ちやんのみならず、凡ての雌猫が悉く爲す處であらう、親としての雌猫は何處迄も立派なものである。

第六節　猫と他動物との親和

世は弱肉強食である、強者弱者を食はざれば一日も生存し得られない、

故に猫の如きも、犬の前には縮むて終ひ、其肉を食はれるけれども、又鼠の前には大王て活殺自在てある、左れば是等の動物は皆敵と云ふても差支はない、然るに茲に一大意識の働きありて、我輩は猛獣をも馴育すること出來る、猫と鼠と、犬と猫と、其同類よりも、其親子兄弟よりも、親密なる關係たらしむることが出來る、昔は仲の悪い者を犬と猿の如しと言つたが、今は之れさへ訂正すべき語となつた、互に相食むものをして親友たらしむることは、左のみ難儀なことてはないのである、弱肉強食は永久に眞理であるけれども、又或強者と或弱者との親和も必ず爲し得ることてあつて見れば、世の中は弱者なるが故に嘆ずべきてはない、況や其弱者も亦或者に對しては強者たるに於てをやである。

諸君は九段の招魂社前にて時々興行する處の見世物や又は處々の神社佛閣に來る處の見世物小屋で犬と猫とが或る藝を演じて居るのを

犬と猫

見たであらう、又犬の上に猿が馬乗をして、道路を歩ける猿廻はしを見たであらう、又々白鼠と猫とが兄弟の如くに遊んで居たのを見たであらう、又々犬と猫とが寝食を共にせるを見たであらう、殊に三越兒童博覧會にて熊と猿と犬と猫とが親友となりて、パラダイスも斯くやと思はしむる程の奇蹟的な一團を見たであらう、彼●●ナンと云ふ猫と金絲雀と馴合ふて、其金絲雀の危き命を助けた話は前にも記した處、何にしても彼等は相食み、相敵すべき者でありながら、互に親子兄弟も及ばぬ親密なる關係を有するに至るのは、實に着目すべき事實たると同時に、又方法宜しきに適ひ、感情熟すれば如何なるものも皆友人たらざるはなしてふ大十分である、而して我輩は犬と猿に就しむる方法を實驗せず、故に之に關しては說明し能はぬけれども、犬と猫との親和に就ては、實驗したことがあるから之を述べたいと思ふ、猫兒先代藤子●●と云ふのは三十九年の五月生れてあつたが、翌四十年四月に野犬の爲めに其生命を隕した、藤子●●は背の黒い腹の白い猫で、且つ兩足共に踵から先は白く尾の先も白かつた、性質は賢い猫であつたから、我輩大に其死を惜み、何とかして其跡代りを入れやうとしたが時恰も夫れと少しも異はぬ犬の子が在つたので、之を貰ひ受け男であるか

ら、名を富士郎と命じ、他の三匹の猫と共に座敷の上に置き、寢食を共にせしめたのである、而して此犬は生後三ヶ月のもので、猫は生後十ヶ月のものであつたが、無論猫の方が犬よりも強い、體は猫に倍して大きくあるけれども、矢張子供は小供である、生後七ヶ月も異ふのであるから猫に比して犬の方が遙かに若く、又弱いのである、初め犬は三匹の猫に驚いた、猫も亦多少驚いたが、近よりて見ても戯れるばかりで敵對はしない、香ひは異ひ、體は異ふけれども、溫柔なる動物であることを理解したそこで彼等は親しむとにはあらねども喧嘩はしなくなつた、又猫の方で喧嘩がしたくても犬の子は喧嘩の何物たるかを解しないのであつた、夫から寢所を同一の場所に設けて兩三夜入れてやつたが、遂には犬も猫も自分同志が入つて寢るやうになり、末は誠に仲の良い友達となつたのである、然るに彼等は病に罹りて死すると共に猫は全然代が

變り、新たに二代目平太郎●●●

も大きい時には多少の時間を要するけれども遂に和すべく、犬が猫よりも甚だ大なる時には猫の方に驚愕と恐怖の念が深く染込んで、先づ親和せしむることが餘程困難であると信ずる、思ふに犬と猿と猫と鼠と、乃至三越兒童博覽會に於て見たるが如き、熊と猫と犬と猿と、何れも敵同士が親和して友人となり居るのも、何れ其馴養者の巧妙なる手段も要したではあらうが、又其凡てが無邪氣なる小供の時から同棲せしめた結果であらう、又犬が雌であり而して出産後其子を失ふた時に、猶乳を求むる程の子猫であるならば、其犬は猫の親となることは世間に多くあることである。

第四章　猫の實用

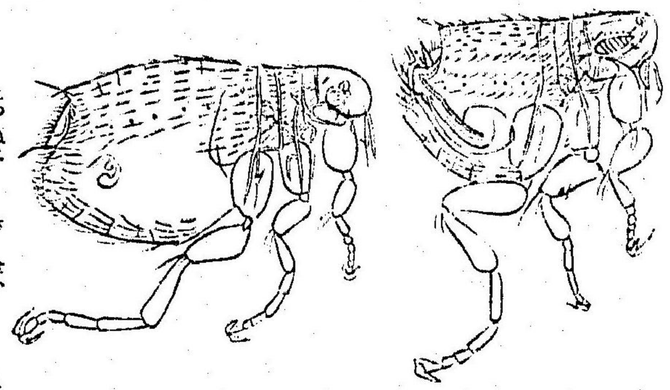
第一節　猫とペスト病

ペスト菌に就ては醫學の素養の少しも無い我輩が容喙すべきことではないが、ペスト病の恐るべきことは見聞により知つて居る、又ペスト菌と鼠との關係に就ても從來當局者が鼠を買上ることにより多少は覺ひ知ることが出來た、而して此鼠を減少せしめてスペト病の蔓延を豫防するに猫を使用することの可否に就ては、可否の論議却々盛んであつたが、去四十一年六月に著名なる醫學者コッホ博士の來朝と共に一決し、ペスト病を豫防する爲には猫をして平生鼠を捕らしむるが良策であると聲明され、政府は猫飼養を奬勵し遂に其訓令さへ全國に發するに至つたのは、何人も記憶に新なることであらう、我輩は猫黨

の一人としてペスト病と猫との關係に就て述べたいのであるが、前述の如く全く門外漢であるからコッホ博士來朝後發表された處の醫學大家の說を掲げて本節の記事を作るであらう。

コッホ博士は印度に於てペスト菌を有する鼠と之を有せざる鼠とを各別室に置き、是等有菌鼠と無菌鼠との交通を遮斷したるに、其無菌鼠は病毒を感染したので、能く其原因を調査せられた處が、鼠と鼠との交通は全く遮斷されたけれども蚤の如きもの、交通は自由であつたから、博士は其感染が全く蚤によりてせらるゝものであることを信じたのである、そこで今度は蚤の交通を遮斷されたるに少しも感染しなかつたのである、是に於て博士は更に一步を進めてペストが人體に侵入する徑路の研究に掛られたのであるが、從來の說によればペストは重に人體の傷口より侵入するものと思はれて居たけれども、博士の研究により此說の誤りなることが判明し、其人體に感染するのは、ペスト菌を有する鼠の血を吸ふた處のプーレックス、セオピス抔と稱する蚤が、人體に喰ひ付き其血液を吸收する際にあることを確められ、茲に平生彼のペスト菌に感染し易い處の鼠を絕やして置くことの必要を認め、有名なる猫飼養の奬勵となつたのである。

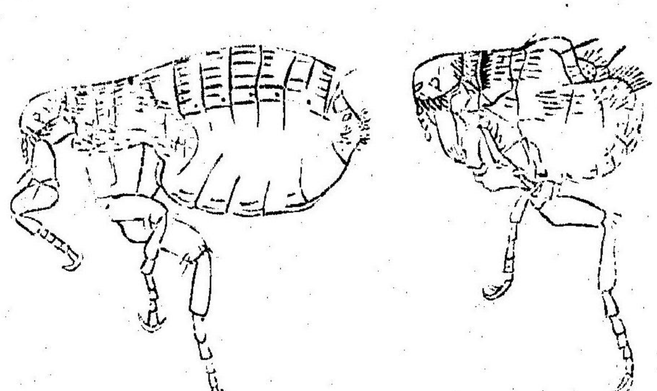
爰で一寸蚤のことを話して置きたいが、コッホ博士が試驗せられたる鼠に於ける蚤即ちプーレックス、セオピスと云ふ蚤は熱帶又は半熱帶地方に於けるもので、主たる產地は印度なることは勿論、又緒方博士の研究によれば我臺灣にも產すとのことである、而して彼の印度地方に於てペスト病の多いのは全く此蚤の多きに由るのであるが、此蚤の棲息することなき溫帶地方例令ば我東京大阪神戶等に於て有菌鼠中に



圖原士博方緒(雄右雌左)セオピス、プーレツクス

此蚤を見るのは、熱帶地方より輸入する綿花其他の荷物中に伏在して來る處の鼠より傳はるものである、彼の開港地及び荷物の集散地方にペスト病が比較的に多いのは、熱帶又は半熱帶地方より渡來する處のプーレックス、セオピスにペスト病菌の寄生せるものが、上陸し擴布せらるゝからで、又一日本鼠に寄生して居る處の蚤はチエラトフヰルス、フアスチアッスと云ふ蚤である、とは緒方博士の談である。

猫に寄生する蚤はプーレックス、フエリス屬のもので、間々鼠にも見ると云ふことである、此猫に寄生する處の蚤は他に轉ぜぬものならば左まで憂ふるには足らぬけれども、鼠にも居ることがあると云ふ以上は、又プーレックス、セオピスと共もにペスト豫防上注意せねばならぬ殊に犬や猫は家族に密接するものであるから、若し有菌鼠に居た處の蚤が犬や猫にうつり、而して後ち吾々人間に附着するやうなことがあれば危險である、斯樣に見て來る時は、犬や猫は却てペスト病の媒介を爲すやうなれども、之に就ては後に述べることゝし、茲には單に犬や猫に寄生する處の蚤と鼠に寄生する蚤との異なること丈を述ぶるに留め置くてあーらう、而して我輩は蚤とペストとの關係に就て最初に研究せられた人はコッホ博士に非ずして、實



圖原士博方緒(雄右雌左)ス、フエリス、プーレツクス

に我緒方博士であることを特筆する。

扱て再び猫の話に立返るのであるが、コッホ博士の猫飼養論に就て其高弟北里博士は次の如くに述べて居られる、曰くペスト病と鼠とは密接の關係を有するものなることは我國に於ても既に認めて居り、從來鼠族驅除策として鼠の買上をなしつゝあるので、當局が買上たる數は夥たゞしい、然れども鼠の如き繁殖力の盛んなるものに於ては單に人爲的方法のみでは其効果が少ない否其勞費に比して甚だ有益とも言へぬ、玆に於て別に自然的方法によりて鼠の減少を計らねばならぬが、コッホ博士が之に猫を使用せんとするのは、生物相互の關係を利用せんとするもので、其効果の多いことは言ふ迄もない、彼の布哇に於て害草ランターナの繁殖を防止せんが爲めに、其草の種子に產卵する處のアグロミザと稱する一種の小昆蟲を利用して其目的を達したるが如

きは最も顯著なる實例であるが、則ち猫を以て鼠を減少せしめんとするも之に外ならぬと、之は實に至當な說で田園に於て斯くの如き例は著者の多く見る處である、而してコッホ博士は此鼠を捕らしむるに、埃及ではクノイモン、印度ではマングスト歐洲ではフレッチユと稱する食肉獸を試用されたが、何れも猫には及ばなかつたと云ふことである、そこで博士は猫の飼養を奬勵すると同時に、其猫を使用して鼠を驅除せしむるの注意とも云ふべきものを發表された。

一、每戶必ず猫を飼養すべき制度を設け、時々警察官をして臨檢せしむること

二、懸賞法を設けて捕鼠に巧みなる猫の種類を求むること

三、世界各地に捕鼠に巧みなる猫の種類を搜索し之を輸入繁殖せしむること

四、猫飼養及び種類の改良奬勵の爲め、猫市又は其他の方法を講ずること恰かも牛馬に於けるが如くすべきこと

五、ペスト病流行地間の航行船舶には必ず噸數に應じ、定數の猫を飼養せしむること

六、家屋建築中に一定の制限を設け、必ず鼠の棲息する屋根裏等に猫の出入口を開かしむること

七、ペスト病流行地及びペスト病進入の危險ある土地に於ては、特に猫隊を設けて鼠族の驅除を爲さしめ、一定時日の間離隔しペスト病に罹るものの有無を檢すること

流石に學者の所説である、而して我輩が日常最も遺憾に思ふことは我家屋には鼠の入る穴ありて猫の入る穴のないことである、天非に於て大騒ぎを爲し居る鼠は座敷に居る猫の注意する處となる丈て全く見

逃してある、是等は直に實行すべく又實行し易いことてあるが兎角疎かになつて居るのは殘念と言はねばならぬ、爾餘の六項固より異存のあるべき筈なく、一日も早く實施せられんことを望み、又一般家庭に於ても出來る丈は注意して此趣旨に添ふべきものであると思ふ、尚コッホ博士の猫飼養説に對して宮島博士も次の如くに言ふて居られる、鼠を退治するには猫を使ふのが便利であるとは何人も疑はぬ處である が從來多數の學者は鼠を喰ふた猫は却て人にペスト菌を傳染せしむることを疑ふて居た、然るにコッホ博士はペスト菌の多くは蚤により て傳染するものであることを發見すると共に、蚤と猫との關係をも詳細に研究して、ペスト菌を有する鼠の蚤が猫に寄生するとも甚だしく恐るべきものでないことを明かにせられ、茲に初めて猫を飼養すべきことを發表されたのである、併しペスト菌を有する鼠を喰ふた猫の恐

るべきは無論ではあるけれども要するに比較の問題と言はねばならぬ、而して猫の効用に就てはペスト病の本場たる印度のベラールに駐在せらるゝ醫師のブカナン氏は頻りに研究して居られるが、其報告書によれば猫の數が全戸數の半數以上ある村にてはペストの流行一回もなく、全戸數の五割乃至二割の飼猫數の部落には稀に少數の患者を出し、之に反してペスト流行の盛んなる處は必ず猫の數が全戸數の二割以下である、そこでペストの發生する家には多く猫が居ないのみならず、部落全體に於ても猫の數が著るしく少ないのに原因することが明かであるから、ペストの豫防には平生猫を飼ふて置くに限るのである、且又印度には猫を神聖なるものとして大切にする種族と甚だしく猫を忌む處の種族とあつて、猫崇拜の種族の古典には家に鼯鼠あれば速かに草林に遁れよ猫を神聖なるものとして常に之を飼へとある又以て猫とペストとの關係を知り得るてあらう、以上諸大家の說により

てペスト豫防の爲めに猫を使用することの必要にして且有効なることは判つたが、試みに東京市内の猫とペスト病との關係を見る爲めに昨年行はれた猫調査表により觀察して見やう。

區別	戸數	飼猫數	飼猫比例
麹町區	一〇、七三四戸	九五八頭	十一戸に對して猫一頭
日本橋區	二〇、七五九	二、〇三六	十戸に對して猫一頭
深川區	二八、四六二	一、五五七	十八戸に對して猫一頭
神田區	二七、六二〇	二、五五〇	十一戸に對して猫一頭
牛込區	一、九七三一	一、四四〇	十四戸に對して猫一頭
本郷區	二、〇三四一	一、三五九	十五戸に對して猫一頭
四谷區	九、六二五	八一六	十二戸に對して猫一頭

赤坂區	一〇、〇八三	八四三
下谷區	三一、五六三	一、六四四
本所區	四五、七〇五	二、八八七
淺草區	三九、九九四	三、〇〇五
小石川區	二一、一四九	一、二三五
麻布區	一五、〇〇九	九八一
芝　區	三〇、二四八	二、六四五
京橋區	二九、四〇五	一、六一一
合　計	三六一、四二八	二五、五六八

十二戸に對して一頭
十九戸に對して一頭
十六戸に對して一頭
十三戸に對して一頭
十七戸に對して一頭
十五戸に對して一頭
十一戸に對して一頭
十八戸に對して一頭
十四戸に對して一頭

之によりて見ると猫の最も多いのは日本橋區で最も少ないのは下谷區である、而してペスト流行の中心地たる深川は十八戸に對して猫一頭本所は十六戸に對して猫一頭の割合であるから、先づ戸數に比して猫の少ない方である、而も猫の最も少ない下谷に比してペスト病の獨占なるが如き觀あるは、偏へに彼の二區が工業地なので其爲にペスト菌を輸入することが多いからであるが、兎に角猫の少ないのにも由るであらう、下谷の如きも決して晏如としては居られぬが、最も危險なのは深川に隣接して居る處の京橋區と言はねばならぬ、此區は表にもある通りに十八戸に對して猫一頭と云ふ少數である、猫飼育の奬勵すべきは實に京橋區である、倉庫抔が澤山あるにも拘はらず、日本橋區にペスト病の流行の殆んど無いのは衛生狀態の佳良なるにも由らうけれども亦夥だしく猫が居るからでもあらう、兎に角商工業地にして猫の多い處にはペスト病なく其少ない處にはペスト病あるは注意すべきである、輸出入的商工業家は家屋又は工場倉庫等の多數の猫を飼養するが良い、左りながら猫さへ飼つて置けばペストは絶對的に防げるとは

思ふのは間違ひてある、大家が猫飼養を奨勵さるゝのは、猫を飼つて置けば其家の鼠が減ずる鼠が減ずればペストの媒介者が無くなる、媒介者が無くなればペストが人體に感染することが減ずると云ふ譯で、詰り一種良好なる豫防法となると云ふのである、猫さへ居ればペストが絶對に侵入しないと斷言せられたのではない、又此事は常識から考へても斯る斷言の出來ないことは猫が居れば鼠は一匹も居なくなると同一てある、然るに玆に一問題が起つた斷言することの出來ないのと同一てある時にペスト菌の有る鼠を猫が捕て來て、臺所で喰べることがあれば其毒血が或は食器に附着せぬとも限らぬ、又猫は人の膝の上に乘つたり、食器を嘗たりするから却て猫によりて媒介せらるゝやうになる、故に猫を飼養することは害ありて益なしと云ふのてある、此說はコッホ博士の來朝前にも勢力のあつた

もので、當時の當局方針は全く其意見によりて猫飼養を奨勵しなかつたものである、處が此說に對して段々專門家の說を聞いて見ると、ペストは猫に對して感染力極めて弱く、學者によりては全く無害であると迄て言ふて居る、假りに猫に感染することがあるにしてもペストの人體に感染して行く方法が他の傳染病と異うから、其恐れは甚だ少ないのである、且又其感染し難い處の猫が若しペスト病に罹ることがあつたとすれば、それこそ大變なことて、其家には恐るべき有菌鼠が居たことの證明となるものてあるから却て猫の爲に病毒の存在を知ることが出來る譯で直に相當の豫防法を講ずることが出來るからして、人體に來らざる前に豫防し得るやうになるのてあると、左ればペスト流行地に於ける猫が鼠を捕ることは心配の種とはならすして安心することが出來るやうになるのて、其場合には一種のペスト計となる譯てあ

る、殊にコッホ博士はペスト流行地にては猫隊をして鼠を驅除せしめ一定の期間は隔離して置くことを述べられ、又戸毎に居る猫ならば流行地に限り猫を消毒するもよし、又鼠を喰ふた跡を消毒するも困難ではない、猫は鼠を捕れば必ず家に持歸る者である、要するにペストと猫との關係は極めて良好なもので、之に由りてペストが人體に感染することは甚だ少ないと云ふのである、否寧ろ平生鼠を捕らしむるは最良の豫防となると云ふからには自から此る疑問も氷解せらるべきである。

第二節　猫と天氣豫報

鳥畜類を以て天氣を豫知することは昔より行はれて居ることで、氣象學の進歩しなかつた時代に於ては誠に重寶なものであつたであらう、

思ふに鳥畜類の或動作を見て、天候を卜することは決して一概に否定すべからざることで、殊に我輩が爰に述べんとする猫を以て天候を知る法の如きは、千に一も違はぬのである、半通的學術上の眼を以て見たならば、氣象臺の報知てさへ時々誤るものを、猫輩で何で判らうかと言はれるかも知れぬが、其心配は全く御無用である、我輩數年の實驗によりて之を述ぶるのであるが、其前に鳥畜類を以て天候を卜することが從來如何に廣く行はれて居たかを掲げて置かう

一、鳩啼けば降雨
二、烏舞へば降雨
三、鴉空に騒げば雨風來る
四、雀空に騒げば雨風來る
五、鴉朝啼けば降雨

六、鴉水を浴れば降雨
七、鳩其雌を呼べば晴天
八、鳩其雌を追へば降雨
九、鷄雛を背すれば降雨
十、水禽木に止まれば降雨
十一、牛地をかけば大風
十二、牛吼ゆれば曇天風吹く
十三、猫顔を拭ふて其手耳を越せば降雨
十四、猫顔を拭ふて其手耳を越さねば晴天
十五、猫の子青草を嚙めば降雨
十六、犬草を嚙めば晴天
十七、犬高き處にて眠れば降雨

十八、蟻穴を閉づれば大雨
十九、蛇日に身を晒せば雨風
二十、魚飛んで水面に跳れば風雨

此外にも未だあるかも知れぬ、併し以上列記した所は自分の實驗したことでないから確否共に何とも言ふことは出來ぬ、之は甚だ遺憾である、然れども次に述ぶる所は其正確なることを保證する、見方を誤らざれば決して違ふものではない、然らば如何にするかと云ふに

一● 猫若し晴天の日の午前中に騒ぎ廻らば、午後は曇天又は降雨となる。

二● 猫若し曇天降雨の日の午前中に騒ぎ廻らば、午後は晴天少くとも半晴天となり、午後ならば夜中に、夜中ならば翌日晴天又は半晴天となる。

茲に言ふ處の晴天とは、一天雲氣なきもので半晴天とは處々に少しの雲を浮べるもので、降雨は說明に及ばず、曇天とは既に空氣中の水氣は飽和して今にも降りたいやうな天氣のことである、左れば晴と半晴天と共に大なる相違なく、曇と降雨とは一歩の差である、先づ同一のものと見て差支ない、即ち猫が或天候の日に騒ぎ廻はれば、其反對なる天候が現はれるのであるから、晴雨共に立派に知ることが出來る、然れども我輩も始めの程大に迷ふた通りに、諸君も左の如き塲合に迷ふであらう、今夜大に雨が降つて居るのに猫が騒ぎ廻はつた、而して明日は天氣であると思ふた、然るに朝起きて見れば大雨てある、斯る時には誰でも迷はざるを得ない昨年十月中にも之に能く似た日があつた、即ち十五日は曇天で、夜に入りて大雨となつたが、午後八時頃猫は十六日の晴天であることを示した然るに起きて見れば篠突く計りの大雨、我輩は多少

迷つて居たが、猶大丈夫であらうと思ひ雨具の用意なしに甲信廻遊の途に就いた、然るに間も無く雨は歇み十時頃には半晴となり、十二時頃は晴天となつたのである、晴天にも降雨にも皆此通りて、見方を誤らなければ、決して違ふことはないのである、然らば所謂猫が騒ぐとは何をするのか、之は實に見易いことである、即ち今迄平靜な猫が、何か思ひ出したやうに室内を驅廻はり、又は障子に驅登り、又は如何に追ふとも爪を磨ぎ抔して、何となく落着かぬ樣子をする、之を假に騒ぐと言ふので、別に大したことのあるのではないから、夫さへ能く氣をつけて居れば良いのである、或は斯樣な閑人は居らぬと言はれるかも知れぬが、何も猫氣象臺の役人ではあるまいし、朝から夕迄見て居るには及ばない、家内の者之を心得て居れば、誰れかの目に着くてあらう、不幸にして目に着かぬことがあれば其時丈が判らぬ迄のことてある、而して又都合の

良いことには、猫が騒ぎ廻はるのは、午前七八時頃と午後の七八時頃が一番多く、而して其時分は家中一番揃ふて居る頃でもあるから、注意して居れば必ず判るであらう、斯くて晴天に雨具を携へ、雨天に天具を持たないで困ることの無いやうにしたなら、其妻君は必ず褒められる、否衣服其他經濟上大利益である、我輩は大きなことを言ふてはないが、近頃途中で雨に逢ふたことはない、諸君の猫も立派に其用を足して居るのに諸君は唯だ之を見ずに氣がつかずに過して居るのである、但し玆に一言斷はつて置かねばならぬことは猫の尾期中は殆んど其用を爲ぬことである、猫の尾期は半狂亂の狀態たるのみならず又家にも居ないものであるから、先づ其用を爲さぬと云ふても良い、且又老ひたる猫は若き猫に比して効能が薄い心持がするものである、扨て以上は經驗によりて明言する處であるが、之が學理上の根據如何に就ては吾輩未だ之を爲す迄に研究して居ない、然れども猫の毛は頗る電氣其他外界の氣象に感じ易きものであるより考ふれば、氣象上の變化も夙く感ずるものと理解される、又猫の耳は非常に神經の過敏なものであるから、其顔を洗ふ時に耳を越せば雨が降るとか降らぬとか言ひ傳へしも、強ち根據の無い說とも思はれぬけれども、何にせよ是等の學理を說明して其信偽を判じ得られざるは殘念である、何れ十分研究を遂げたる後ち補遺として發表するであらう。

第三節　猫の皮と毛

猫の皮と毛の用途に就ては直に猫を殺すことを意味して居るから陳述すまいと思ふたけれども之亦猫の用途の一であるから忍むで記述することゝした、而して此猫の皮は言ふ迄もなく樂器三絃の胴皮となる

るので其毛は筆に用うるのである、扨て三絃の胴皮には犬の皮を用ひたのもあれば又猫の背皮を用ひたのもあるけれども、其最も良いのは猫の腹の皮で張つたもので、俗に四乳と稱するもの即ち乳が二對其表面に現はれて居るものである、然れども三絃の胴皮は猫の腹の皮でさへあれば良いと云ふ譯には行かぬ、先づ猫の年齢から言ふ時は生後六七ケ月頃のものが一番良いので二年三年と歳を經るに從つて其價値を減ずるのである、其理由は生後六七ケ月位な子猫にありては未だ春情が起らぬから、交尾せんとして狂奔するやうなことなく、且又所々に遊び歩かぬので、自然其皮を傷めることが少ない、言はゞ無痍であるから三絃の皮には最上等なのである上に、其腹の皮が薄くして軟かいので、愈々以て優等なる三絃の胴となるのである三絃師の云ふ處によれば上等物を製するには必ず生後六七ケ月位のものに限るので、如何に

無痍であつても二年三年と歳を經つたものは到底下等物より出來ないとのことである、次には同じ生後六七ケ月のものなら牝でも牡でも變りはないかと云ふに、之には大なる差異はないけれども、併し何れかと言へば牝は牡よりも柔順であるから從つて傷も少ないから先づ擇ぶとすれば牝の方が良い、而して今度は猫の毛色であるが之は白色が最良で次は虎猫、黒色の熊は最も不良である則ち白色と虎猫との皮は製造すれば純白となるけれども、熊猫の皮は製造しても尚暗色を帶ぶるものである、左れば三絃用としては白色牝猫の生後六七ケ月のものて而も腹の無傷のものが第一であるから、白の子猫を有する方々は猫泥棒に盗まれぬやう注意が大切である、虎猫を飼養さるゝ方々とても決して油斷が出來ない、黒の熊猫を有する人は先づ安神ではあるけれども之亦相當に用途のあるものなれば、成る可く愛護するのが肝要て

ある、然らば是等の猫の皮は何程の市價を有するものなるかと云ふに、固より相場の高下一定すべきものではないが、白色優等物の生皮は七八十錢位、黒色の二年三年と來ては一枚十錢位とのこと、又精製したるものは優等物一枚一圓八九十錢に及び劣等なるものは四五十錢位である、三絃の需用は多く從つて猫の皮の需用も多いことでもあり、且其値段も優等物は生皮にて七八十錢にもなることであるから、猫泥棒に取りては能き日當となる譯である、猫泥棒は其名の如くに、巧妙なる手段を以て誘殺することであるが追々と外國産高價の猫も殖えるので あるから、之を殺されては理窟にも何にもならぬ、下等無恥なる徒を捉へて何故殺したと詰責しても跡の祭り、遂に彼の怨みを買ふて又新しいのを殺されるのが常である、故に自分で十分保護するより外はない、但し政府の方でも猫籍を作りて置いて猫を保護することは、今後益々必要であらう、猫の毛は筆に使ふのであるが、市價百匁に付き二三圓位である、皮や毛の精製法は我輩に於て之を記するの勇氣がない、然り猫の皮が三絃に用ひられて高價に賣れることを述べるさへも不快の極みである。

第四節　猫と社會經濟

『暴鼠』と云ふ俗曲に面白いとが讀込である、今之を抄錄して見やう、

前略、大將耳を打振てサア〳〵手下の鼠共、先十四五匹は茶の間料理場臺所、葵卸ろしに蹶づくな、流しの元には水瓶あり、ふちを傳ふてはまるなよ、扨又杵と枡落は合點かよ、必ず〳〵忘れても棚の道具を引落し、飯炊婆を起すなよ、扨又歯ぶしの達者な奴原は簞笥長持かぢるべし云々、

彌次郎北八の兩人が東海道を旅行して蒲原宿の木賃宿で六部と談話

を試みて居るが、之は又一世の滑稽屋であるから話すことも破天荒である。

六部『わしがハア若い時分にお江戸に居申したが、其時あんでもハアー夏のとッつきから秋へぶつかけて毎日々々くゝなく風の吹いたことがあり申した、其時分何でも金儲のうすべいとつて、色々首サアひねくり廻ひて、とつけもないこと思ひ着いたあもし』

彌次『はてのう』

六部『箱屋をおッぱじめ申したわ』

彌次『はて、風が吹いたによつて箱屋とは、どう云ふあんじだの』

六部『さればサアわしがハア思ひ付いたにや、あにがさて毎日々々くゝやうもなく風が吹いてお江戸てはガイに砂ほこりが立ち申すから、おのづと人さあの目まなこへ砂どもが吹こんで目玉のつぶれるものが、たんと出來るだんべいと思つたから、そこでハアわしが工夫のうして世間の俄盲が外にあじやうせうことはなし、みんな三味のう習はつしやるだんべい、そうすると三味線屋共が繁盛して世界の猫共が打殺されべい、そこで鼠共がづなく荒れてあんても世間の箱屋商賣のうおッぱじめたら、賣れべいこたあ違ひはないと、あにがはのうかぢり無くすべいこたあ目の前だあ、若しコリヤハアこゝて箱身上ありぎり箱共のう仕入たと思はつしやい……』

流石は一九先生、風が吹いたから箱屋を始めたとは奇想と云ふべしである、而して之れ前記の一俗曲と合して如何に鼠が慘害を吾々に與ふるものなるかを證明するのである、勿論鼠が吾々の大切なる器具又は書冊乃至農作物を害することは現在見て居ることであるから、書冊に書いてあることや或は俗曲抔を態々引いて來るの必要はないけれど

も、又以て鼠が與ふる慘害を知るに妙であらう、殊に一九先生のは猫が居ない時を想定したのであるから、愈々以て無猫國の暗黑を知るに適當である、我日本國に於て現今鼠の爲に如何程の害を受て居るか固より正確なる計算は出來ないけれども、一戸一年二圓平均と見積りても無慮二千萬圓の損害を受て居るのである、或は貴重なる器具や書冊を喰はれるものもあらう、又高價なる衣類を不用物とせられたものもあらう、農作物の種子を殼とせられたものもあらう、大切な蠶や繭を喰はれたものもあらう、之等のものになると一圓や五圓の損失ではない、中には何十圓乃至何百圓の品物もあるに違ひない、勿論手桶や飯櫃位なものもあらうから、先づ平均二千萬圓と見るのであるが、之より多くとも少ないことは斷じて無いと思はれる、鼠族の慘害や實に大なりと言はねばならぬ、全國到る處に猫が居てさへも此通りであるが、若し一九

先生の言ふ如くに猫が一匹も居なかつたならば、而して俗曲にある通りに鼠が働いたならば、如何に大なる額に上るであらうか、之は到底想像することが出來ないのである、而して以上は鼠によりて直接受る處の損失であるが鼠の減少は又農作物の作柄にも大關係のあることは何人も知る處である、曩古の大學者ダーウヰン先生は其名著に於て或地方の花は猫の爲に左右せらると述べて居られるが、次に錄する說明を見れば誠に燎然たるものがあらう、曰く赤つめ草は虫類の媒助によりて花粉を受け種子を生ずるものであるが或一種の蜂は好むで赤つめ草に來るので其成實に就て此蜂の媒助を受けることが甚だ多い、故に此蜂の多少はつ●●め草の種子を生ずるに大なる關係があると云ふべきてある、然るに此蜂の巢は不幸にしてはつ●●か鼠の好む處なので、又は●つか●鼠の多少は蜂の繁殖に大關係がある、而して此はつか鼠は猫の多

少によりて左右せらるゝものであるから結局猫が多く居れば赤つめ草の實が多く出來ると云ふことになるのである即ち猫が多ければ鼠が減ずる、鼠が減ずれば蜂が殖える、蜂が殖えれば赤つめ草の實が多くなるのである、自然界のことは何でも此の如きものであるから、此記事は直に取つて我が農作物や園藝等の損益豐凶を說明することが出來るのである、又以て鼠の減少と農作物との關係を知り其鼠の減少に與りて效ある猫の有無と農作物との關係を知り得べきではないか、之によりて猫が個人々々の爲に大なる利益を與へ、個人の合計たる社會の利益の爲めに猫が大なる貢獻を爲しつゝあるを諒解することが出來るであらう況や猫はペストの豫防者となりて其地方にペストの來侵することを防ぎ衞生狀態を良好ならしめ、積極的には人類の健康を保維し費用の支出を減ぜしめ、消極的には地方人民の生活の不安を除き

自由なる活動を爲さしむることであるから廻り〳〵ては個人並に社會上の經濟に利益を供するに於てをやである、猫の皮や毛が一部の利益となるのも爭はれぬが、猫が死して與ふる利益よりも生きて與ふる利益の方が更に大である、居れば邪魔物扱ひを爲し、居らねば其德を思ふは人情の弱點、我輩は切に其悔無からんことを望むのである。

第五章　猫の美談

第一節　猫に美談少なき理由

戸毎に愛養されて居ながら化けるの踊るのと言つて、唯だ悪罵を浴せ掛られて居るのは猫である、犬がチン〳〵をすれば愛らしと言ひ、猫が手を振れば踊ると稱して罵詈の種とする、又化けると云ふ話に就ても狐などには相當の美談佳話がある、然るに猫に於ては例令佳話と認むべきものがあるにしても、一概に化猫だの猫化だのと言つて善悪共に悋猫として終うのである、之は全く誤解又は迷信から來て居るもので、猫に取りて甚だ迷惑を感ずる次第である、彼の釋迦の死歿した處の繪像に於て萬の動物が見舞に行つて居るにも拘はらず、獨り猫のみは之に參せず又參ずるを許されなかつたとやら、之に就て何か根據のある

ことかと思ひ其道の僧侶抔に聞いて見ても、異口同音に何等の根據の無い説に過ぎぬ、詰り猫が畵いて無いので理由も根據も無いのであるが家畜として各々が飼養して居るものが見えぬよりして、一際目立つのが元となり、種々なる臆説を加へて、今日傳ふるが如くに言ふに至つたと語らざるはない、右の次第であるのに世事利導に不熱心なる僧侶等は是に正解を與へんとはせず、却て世俗の信ずるが儘に言ひ做したので、愈〻以て之を事實の如くに確信するに至つたのである、釋迦如來の死目にも逢へず、又お墓參りも出來ぬ處の猫は、人間ならば極悪無道の業人である、猫は飼ふとも心を許すな、年を老れば化けて出る、斯樣に思ふて居る處へ、輕薄なる作者と云ふ輩が、傳ふる處の猫の僞悪なる化性を利用して、鍋島の猫騒動であるとか、有馬の猫騒動であるとか、種々なる俗悪無稽な講談物を作つて、智慮なき階級の耳目に觸しめたので、遂

に猫は全然偽悪なものとなり終つたのである、左れば猫に關しては恐ろしい獰猛な談話が多くて美談佳話の極めて少ないのは必然な結果で、決して怪むに足らない、然らば猫には犬や狐の如くに美談は無いかと云ふに然らずて、唯だ其美談佳話を一括して猫の變化として傳へたので、美談佳話も現はれず、又其數も、犬や狐に比しては極めて少ないのである、即ち猫に美談の少ないのは迷信と誤解に原因して而も作者講談師等が下流の階級に之を投じたるより馴致したものであると信ずる、期くて猫は憐れにも生れながらにして偽悪な動物と認められ、戸毎に飼養しながら恐るべくして親しむ可からざる家畜とせらるるに至つたのである、之より猫に關する美談佳話數篇を擧げて、偽悪なる家畜と認められつゝある猫の爲めに冤を雪ぐてあらう。

第二節　一巖寺の白猫

昔奥州の岩沼と云ふ處に一巖寺と云ふ寺があつたが、其寺の住職泰山と云ふのは、非常な猫好きて一匹の白猫を小さい時分から育て、其名を丸と名けて寵愛して居た、丸は亦住職に馴着て畜生ながらも住職の言語を解したとやら、丸や煙管を持つて來いと言へば煙管を喰へて來る、團扇を持て來いと言へば間違ひなく團扇を持て來ると云ふ風に、住職の言ふことなら能く理解したので、近傍の者は誰れ言ふとなく一巖寺の化猫〳〵と誹り、其内にも親切がましい者共は今に和尚は猫に喰はれて終ふと案じ出す、殊に氣早い者は白猫が婦に化て居たのを見たとさへ傳へて、互に罵り合ふて居たが、或日の事和尚泰山は一杯の冷酒に酔を催して、氣持良く寢て居ると、和尚樣々々〳〵と聲を掛ける者がある、振

向いて見れば疑ふ方なき愛猫の丸、和尚は不思議に思ひつゝ丸の語るを聞けば私も永い間和尚様の御寵愛を受ましたが、根が畜生の悲しさに何の御恩返しも出來ず、自分ながらもお恥かしふ感じて居まするが、扨て和尚様明晩一人の旅僧が此寺に參り、一夜の宿を貸せと云ふに違ひありません、此旅僧こそは人間ならで年經た鼠で、宿を和尚様に借り申し、和尚様の眠つて居る處を喰ひ殺さふとするのですから、御用心が一第一、又一旦彼の鼠に見込まれた以上は宿を斷るも無益なこと、又和尚様が檀家へ行つて宿るとしても何の効もない、夫れよりは一層心良く宿を貸してやる方が宜しい、寢かすのは本堂の側に限りまする、そこて其鼠が和尚様を喰はふとして出て來る處を私が飛び着いて鼠の命を取り、和尚様をお助け申す覺悟、之が永年御寵愛を被むりし御恩返しで御座ります、尤も私は明日の午後になると、姿を隱しますから、若し姿を

隱しましたなら御用心なさりませと、斯く言ひたる後ち猫は何れにか去つたと思へば目が覺めた、和尚泰山は氣が氣でない、明晩は鼠の爲に命を取られる、それとも猫が助けて呉れるか知らん、イヤ〳〵夢は五臟の疲れ、聖人に夢なしと云ふから愚訥は夢も夢斯様な惡夢を見るやうては佛弟子とも言はれまい左るにても平生愛した丸が枕神ならぬ枕猫になつたことであるから、疑ひの中にも油斷は出來ぬ、何に致せ明日の午後は姿を隱すと云ふから、之を印に決心を極めずばなるまいと兎や角思へば思ふ程空恐ろしくなり、出家の身にも五慾纏ふてか、其夜は終に一睡もせず、唯だ朝の烏の啼聲を待つたのである。

夜は明けた、丸は常に變はらず和尚の言ふことを聞いて居たが、正午頃になると丸の姿が見えなくなつたので、和尚泰山は昨夜の夢のことを思ひ出し、心配になること一方ではない、愈々今夜は命を取られるのか、

之が此世の見納めか、それとも丸が助けて呉れるか知らんと、思案に暮れて居る處へ鼠色の衣に白の手甲脚胖、前には頭陀袋を懸け、網代の笠を被むつた處の老僧一人、笠關にて笠を脱ぎ頼む願ふと聲を懸けたので、泰山和尚は腹の中の千萬斛の憂ひを押隱し、御用は何と言ひも終らぬ中に、其老僧は自分は諸國修行の旅僧行暮れて難澁致す、幸ひに一夜の宿を貸し給はれよ、御本堂は尚も勿體なし、庭の隅にても苦しからず、之より僧侶同士の挨拶を爲し、和尚は丸が居ぬからは之れこそ年經た鼠の化物に相違なし、油斷はならじと心の緒を締めながら四方山の話を爲しつゝ食事の拵へをする、食事萬端式の如くに濟まして暫し語り合ふ中に早や夜は更けかゝる、旅僧は明日の旅もあるから休みたいと云ふので、和尚は丸の教へし如くに本堂の側へ寝所を設けて寝に就かしめ、自分も寝室に入つたが、和尚は今が命の瀬戸安々と眠られやう筈

もなく、色々と物を考へては獨り憂ひに沈むで居ると、其旅僧を寝かして置いた本堂の方にギヤッと云ふ聲が聞へた、扨てはと思ふて起き上れば其騒ぎの大なること御堂の佛像が一時に倒れるかと疑はれ、其嘶聲の猛々しきこと百獣の一時に唸るが如くである、和尚は恐る〳〵燭を手にして本堂の様子を見れば、二尺に餘る大鼠と永年愛育した猫の丸とが格闘の眞最中、窮鼠却て猫を噛むとあるが大膽にも和尚を喰はんとて來れる鼠のことなれば、丸に噛まれた位にては弱りもせず、互に上になり下になりして死力を盡して居る、其有様は豺狼相戰ふにも似、龍虎相搏つが如く、誠に凄まじい、和尚は命の恩ある猫に負を取らすまじ、又猫が負くれば我命に關はる一大事と、愛と慾との兩道より、丸に加勢して頻りに丸よ勝て、丸は勝たと叫むだ處が、其聲は人里離れし山寺の鐘よりも高かりしと見え、村人二三人何事の起りしぞと驅附け見